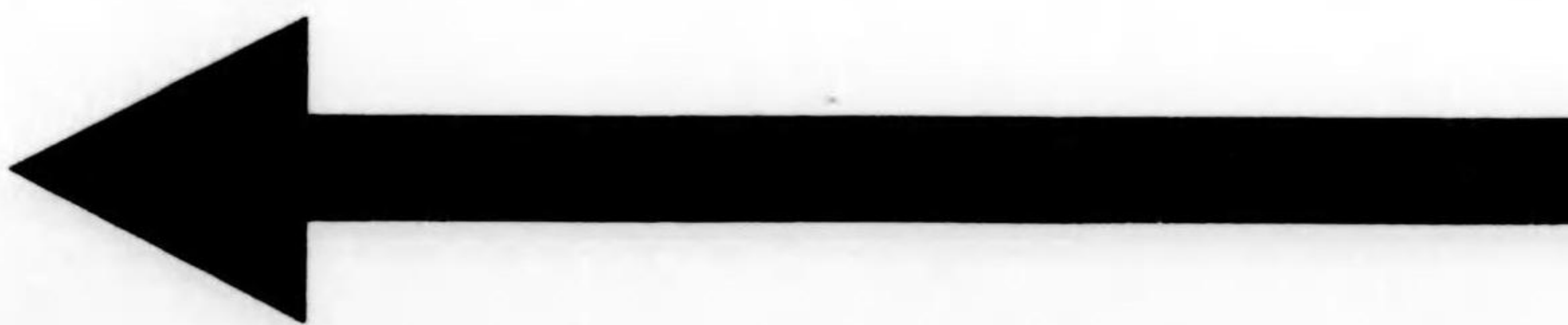
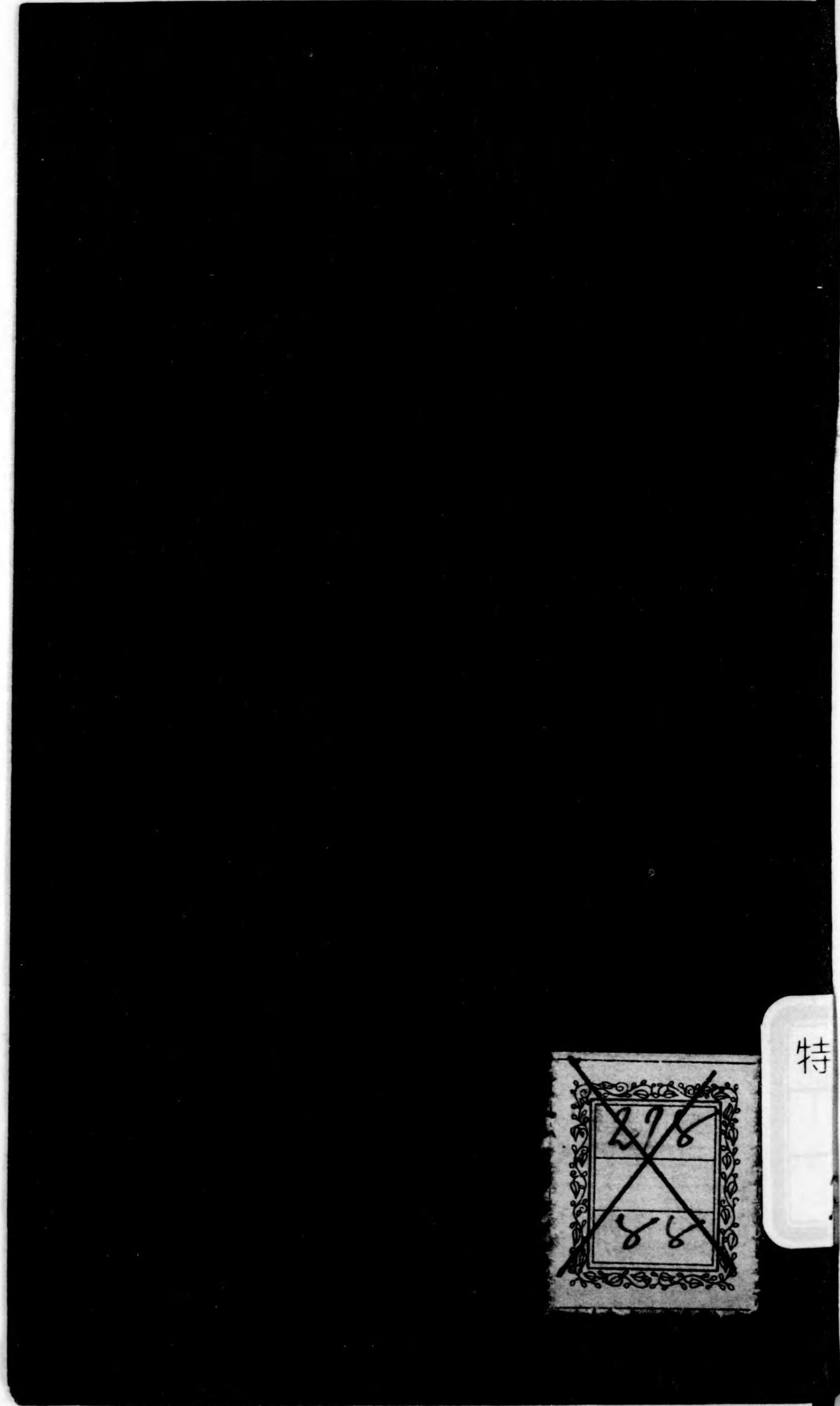
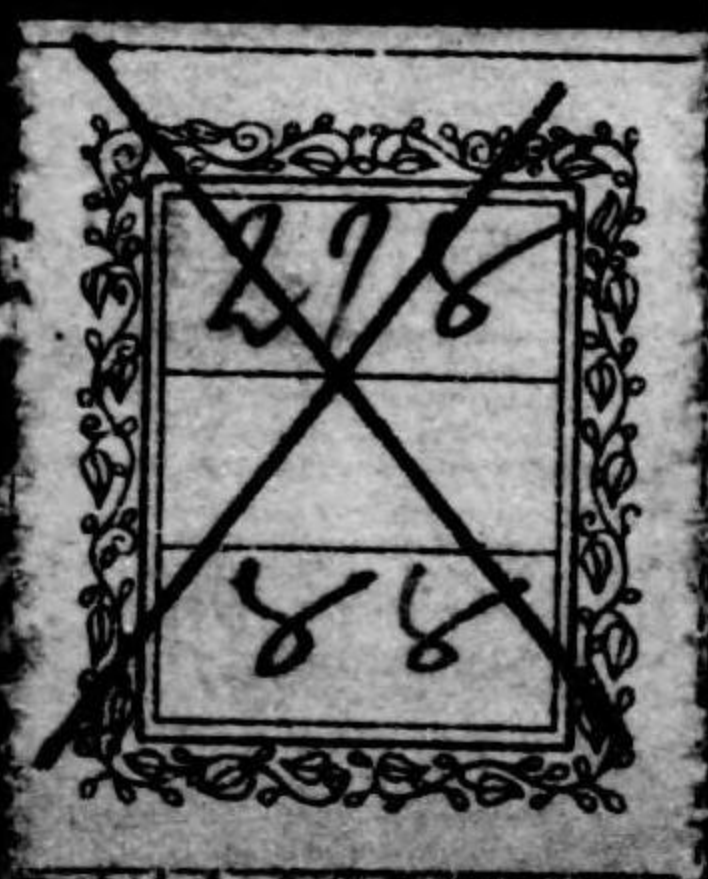


始



特

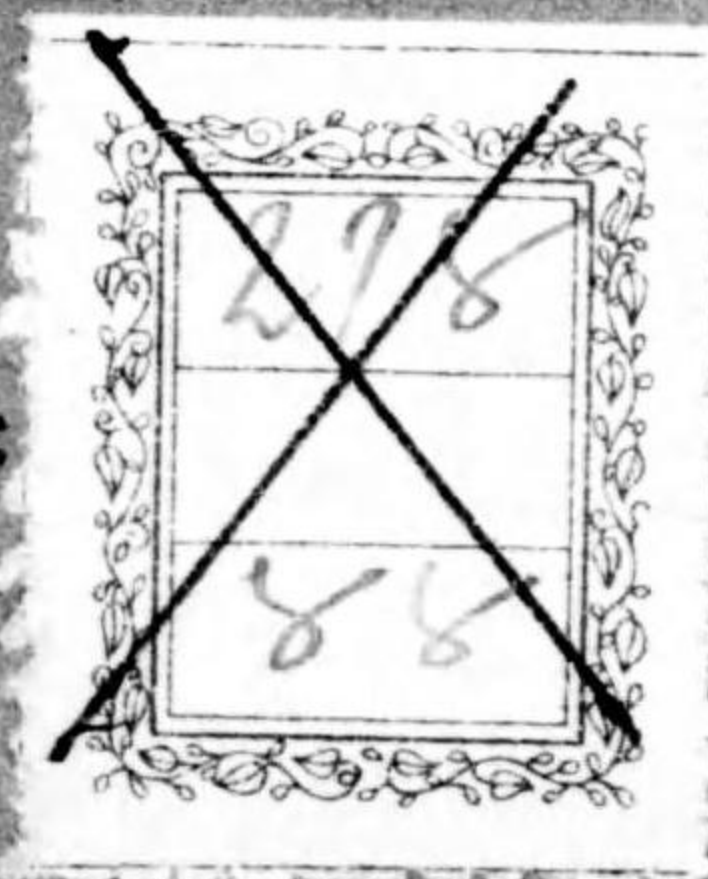




世界の  
七大血戦

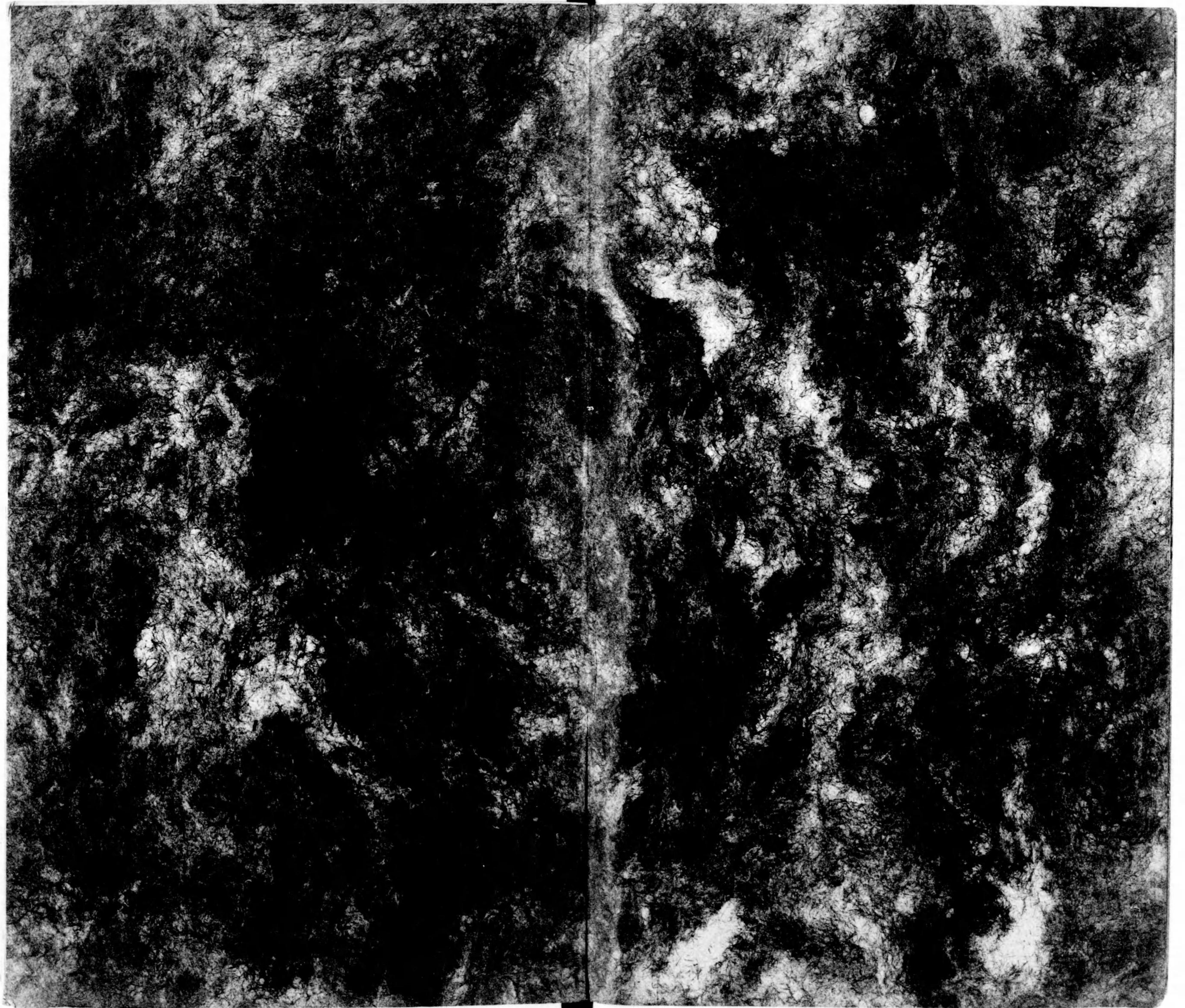
岡本政治著

行發館隆保



特







特101  
779

岡本政治著

世界の七大血戦

大正  
3.12.10  
内交



## 自序

戦争は歴史の花である。勇しくも美しい戦物語の多くを國史上に有する我々は、常にそれ等によつて忠君愛國の志氣を養成せられて行く。歴史を彩り、國民を感奮せしめた、古來の東西諸大戦の中、更に一層悲壯の調を帯びた七戦を選んで、事實と、それに對する詠歎的感情との調和を試みたのが本書である。非才と紙數の制限とは、最初の豫期に反する事頗る大なる結果を齎したが、もしも、これによつて、多少なりとも勇敢悲壯なる戦物語の味はひを傳へ、志氣養成の一端に資する處があれば誠に以て望外の幸ひである。

時恰も初冬、冴え渡る寒月の窓下、ラインの岸に、セーメのほそりに



祖國の爲に銃さる人々を慰びつゝ、靜かに想を過去幾多美はしき血戦史  
上に馳するは、何たる會心の事であらう。

大正三年十一月

諏訪山麓にて

著者識

### 世界七大血戦目次

- 一 テルモビレーの死守戦……………一
  - 一、死を見る歸するが如きスパルタ武士……………二、大軍潮の如くギリシアに迫る……………三、兩軍血雨を浴びて攻め戦ふ……………四、噫！月下に苔むす記念の石碑
- 二 サラミス大海戦……………一三三
  - 一、「アテ子の將來は海にあり」……………二、オレオス水道の血の波……………三、「汝等たゞ木の壁によれ」……………四、決死の勇戦全土の危急を救ふ
- 三 項玉最後の戦……………四五
  - 一、二雄先を争ふて秦都に向ふ……………二、宴中の劍舞……………三、忠臣命を擲つて君を救ふ……………四、夜深うして四面楚歌の聲
  - 五、烏江畔最後の血戦



四 赤 壁 の 戦……………六八

一、劉備三度孔明を訪ふ……………二、長坂橋上の阿修羅王……………三、吳に説く英雄三寸の舌……………四、江上火攻の計略……………

五 壇 の 浦 の 戦……………八五

一、よるべなき舟路の旅……………二、兩軍の陣容……………三、遠矢の戦……………四、「波の下にも都ありさば」……………五、能登守教經の奮闘……………

六 モスクバの大火……………一〇八 (2)

一、無人の都……………二、炎の海、炎の河……………三、困苦漸く全軍をおそふ……………四、吹雪の嵐とコサツクの追撃……………

七 日本海 大海 戦……………一二〇

一、波濤萬里東に向ふ大艦隊……………二、對馬水道の硝煙彈雨……………三、敵旗艦最後の奮闘……………四、大艦隊の末路……………

目次終

# 世界七大血戦

岡本杏葉 著

## 一 テルモピレーの死守戦

(花と散りしスパルタ王レオニダス)

### 一 死を見る歸するが如きスパルタ武士

西暦紀元前四百八十年(今より約二千四百年前)、春まだ寒き南アジアの大平原を、當時日の出の勢であつたペルシアの大軍は、前敗の恥辱を雪がんと爲、血に餓えた狼の如く、楯をさし上げ、戈を振りまはし、喚めき叫んで西方ギリシアをさして進撃した。

この大軍を迎へんとするギリシアの有様はどうであつたか。當時ギリシア(今のバルカン半島南部)は數多の小國に分立して居たが、その中でも、スパ



ルタミアテネスは、その勢共に強く、殊にスパルタは、武を貴び、廉潔を好む事、恰も、日本武士の倂そのまゝの國であつた。

スパルタでは、男子生れて七歳になるまで、國立の教練所へ入れて体を鍛へ武を練らしめる。もし、到底成長の後武士として國のために働く事が出来ぬ程身體が虚弱であるを見たらば、親は現在の我子をテゲトスと稱する山中にすてて餓死せしめた。

國立の教練所では、體操、投槍、擊劍、競走、投球等、武士として必要の課業のみを練習せしめ、膽力を養ふ方法として、極寒極暑の折にも、只一枚のマントルを着てわらの上に寝かしめ、毎朝河中に入つて冷水に浴し、血の出るまで鞭うつて一言の不平をも洩らさしめず、食物を與へずして餓にたへるの習慣を養ひ、跣足で惡道を歩かせて困苦を凌ぐの勇氣を起さしめる等、今日よりいへば、むしろ慘酷な程の厳しい教育を施した。その教育は七歳より三十歳まで續き、その間は暫くも、家に歸る事を許されない。三十歳になれば、はじめて

武士となり、一定の職務を與へられるが、しかも家に在つて寢食せず、公會所で他の武士と共に食事し、共同寢室で眠る事に定つて居た。

嚴格な教育や躰を、今日でもスパルタ式といふ場合がある。けれども昔のスパルタは、到底今日より想像の出来る程それ程生優しいものではなかつたのであつた。卑怯未練や、破廉耻な行爲は、スパルタ武士は死すまも行はぬ。男子すでにかくの通りである。女子も又男子に劣らず、よく男子をして後顧の患なからしめたばかりか、世に傳はる美談の數々をさへ殘す程、美しくも又雄々しかつた。

母あり、その子の戰場に出でんさするや、楯を授けて誠めて曰く、  
「汝これを携へてかへれ。然らずんばこれに乗つてかへれ。

携へて歸るのは、戦勝つて名譽の凱旋である。乗つて歸るのは刀折れ矢盡きて名譽の戦死である。「勝てよ！國の爲に勝てよ！」  
勝たざれば國の爲に死すべし！」。スパルタの母は、戰場に出た子が、何の手



柄もなく無事に歸るよりは、勇戦奮闘のみに戦死をさげた知らせをきいて、手を拍つて萬歳を唱へたのである。

愛子五人を悉く戦場に送つた。母がある。その後は只管其の安否を案じつゝあつた處、ある人來つて告げて曰く、

「五人の御愛息は皆戦死を遂げられました」。

誰か此を聞いて驚かぬ親があらうぞ。しかも母は忽ち怒つていはく、

「何事を仰せられる。妾が日毎聞かうとして待ち構へて居るのは、五人の子のたよりではなく、實にスパルタ軍の勝敗であります」。

と答へて、睫毛一筋動かさなかつた。

あゝ、外に勇武たぐひなき軍隊を有し、内に男優りの婦人を持つたスパルタが、向ふ所に敵なく、遂にギリシアに覇を唱へたのも、誠に故ありさいはなればならぬ。

しかし、この勇壯なスパルタも、アテネも、その他の國々も、ギリシアの國

々は皆ペルシアに比べては物の數にも足らぬほどの小國に過ぎなかつた。スパルタ如何に強くとも、寡は衆に敵し難いのは自然の理であつた。ここに乘じて大國ペルシアは、たゞ一もみにギリシアをもみ潰さんと、紀元前四九二年、先第一回のギリシア遠征を試みたが、ギリシア全土の同盟軍のため散々にうち破られて美事に失敗した。

それと見たペルシア王ダリオスは、大に怒り、此度こそは、先使をギリシア各國につかはして降服をすゝめ、もし命を用ひざるに於ては、海陸の大軍忽ちギリシアをふみにぢらんと脅しつけた。そのために、數多の小國は勢に恐れ降参したが、鍛へに鍛へた武士魂を有するスパルタが、どうしてそのまゝ降参しよう。すぐさま使を捕へて、審に投げこみ、ダリオスに答へて曰く。

「汝我が國を奪はんと欲すれば來つてされ。我何ぞ恥を忍んで汝如きに降らんや。」

つゞいてアテネも、スパルタと同じ回答をペルシアに與へた。



これを見たダリオス、烈火の如く憤り、數十萬の大軍を率ゐ、たゞ一もみ先アテネをさして進撃したが、又もや、アテネの雄將ミルチアテスの爲に海陸共に散々に打ち破られて、茲に第二の遠征も見事失敗に終つて了つた。

ヘルシア王ダリオスは、この敗報を聞いて怒り心頭に發し、更に優勢な大軍を發して、一舉にギリシアをふみにぢらん企てたが、不幸にも、その機を得ぬ中に病死して了つた。

ところが、その子クセルクセスの代さなり、ギリシア遠征は三度ここに企てられて、今度は總勢百七十萬、兵船一千二百隻、クセルクセス王自ら總大將さなり、海陸並び進んで堂々ギリシアに迫らんとした。これ即ちギリシア遠征の第三次、これより説かんとする。壯烈鬼神をも泣かしむべき物語のいさぐちである。

クセルクセスのこの企てを聞いたギリシアは、スパルタ、アテネをはじめ

し、諸國共同一致して、この大敵にあたらんとした。

黒雲ギリシアの空をたてこめて、雨か風か雪か嵐か、全身勇氣にみちゝたギリシアの諸國は、今や、眼にあまる大軍を引きうけて、國のため、祖先の名譽のため、各々の持場々々を固めたのである。

## 二 大軍潮の如くギリシアに迫る

冬を忘れ切らぬヘルシア平原の限りもない大空には、雪氣を含んだ綿雲がしばいにひろがり、眼のまぶく限りの野には、杜草が力なく腐れて、若芽はまだ意久地なく土の底に埋れて居た。空と平原との相接するかすかに遠い地平線のほそりには、肌寒い早春の風に煽られた砂埃が、旋風のやうに舞ひ上つて海の遠鳴のやうな風の音が、たゞさへ冬の永い眠に怖氣づいた小島の夢を驚かす。——紀元前四百八十年早春、ヘルシア百七十萬の大軍は、その冬ごもりの陣營サルデスを出發して、冬枯の眠さめぬ大平原を西に向つたのである。



單調な道は全軍の前に涯もなくつゞいた。鐵甲を被り、手に圓形の楯や弓矢を携へた、メデア、ペルシア兵、麻製の胴甲を着、棍棒をかついだアッシリア兵、綿服を着て竹製の弓矢を提げた印度兵、獅子や豹の皮をまこつて石の鏃をつけた矢を持つたエチオピア兵、投鎗と劍さを持つたトラキア人、これ等の種々雑多な兵種から成つたペルシア軍隊は、その涯もない平原の道を、前途の勝利と掠奪との愉快を夢みて、猛獸のやうな眼を輝かしつゝ、飽きもせず進軍をつゞけて行つた。

何の面白味もない、殺風景な平原の行軍は七日七夜の間殆んどぶつ通しにつゞいた。漸く南アジアの平原を通りぬけて、ヘレスポンドの海峡にまでついたのである。

全軍の前には深い碧色の海が強い光を放つて輝いた。血に餓え、單調にうえた彼等は、どんなにこの海をうれしく眺めた事であらう。ギリシアは近い！ 思ふがまゝにふみにぢり、思ふがまゝに掠奪を行ひ得る敵國ギリシアは近い！

全軍の意氣は餓えたる狼の如く荒く、楯をたゞき、矛を振つて、その海峡に架け渡した長さ一哩の大船橋を渡つた。

船橋を渡るさやがてドリスコスの野についた。百七十萬の軍隊は一先づここに勢揃ひをなし、隊伍をさゝのへ、小アジアの沿岸より、アトスの運河を過ぎて西にまはつた千二百隻の大艦隊は、海陸呼び應じて、大河の堤を破るが如く、陸はトラキア、マケドニア、テッサリア等の小國を横ぎつて北方ギリシアに侵入し、海は船艦相ふくんで波を壓しつゝ、アテネの海上に押し寄せた。

これより先、アテネには勇將テミстокレスあり。盛に海軍を擴張せんことをはかり、衆議を排して兵船を造り水兵を養ふたが、ここにペルシアが、全力をあげてギリシアに向つたさ聞き、ギリシアの諸州は急に會議をコリント市に開いた。ところがその會議に於て、ペルシアの勢に怖氣づいて一致の行動をさらぬところも出来、結局、スパルタは陸を、アテネは海を、他の小諸國は各々兩國を補助する事となり、飽くまでも無禮なるペルシアの侵入を食ひこ



めようとした。

さて、陸を守るスパルタは、その位置最もギリシア諸國中の北にあり、ヘルシア軍がもしギリシアを犯さんとするならば、是非とも先スパルタを突破しなければならぬのである。もしスパルタにして破れんか、ヘルシアの大軍は潮の如く南下して、ギリシア全土を荒らしつくすのである。スパルタの責任の重くして大なる、たゞに自分一國の安危のみではなく、ギリシア全土の安危を双肩になつて居るのであつた。

ヘルシア軍が南下して、スパルタに押し寄せようとするには、必ず通過しなければならぬ一つの難關がある。それは、スパルタの北端、一方は海に面し一方は山に迫つたたゞ一條の嶮岨なる坂道、——即ち有名なるテルモピレーの要塞である。スパルタは勿論早くここに敵を食ひこめんとして、王レオニダスは、自國の勇敢死を見る歸するが如き三百の精兵を、輕装したる歩兵一千人その他、諸國の援兵七千餘人、合計八千三百餘の兵を率ゐる、自らこの要關を

守つたのである。

ヘルシア方も勿論、先目ざすところはテルモピレーにあり、その要塞さへ陥らば、すでにギリシア全土を手に入れたのも同じである。百七十萬の大軍は僅かに八千有餘の小兵を以て守れるこのテルモピレーの嶮要に、雲霞の如く押し寄せたのであつた。

### 三 兩軍血雨を浴びて攻め戦ふ

テルモピレーはギリシアの北門であつた。東は、熱湯のやうに狂ひ立つマリア灣に望み、波の花の散る海岸から、急傾斜をなしたカリドロモス山が西に延びて、恐しい形の岩が拳を振りかざしたやうに折り重つて居る。たま／＼少しく平な所があれば、そこは温泉から湧出す熱湯がたえ間なく流れ落ちて、岩の面は油をひいたやうに滑かである。その恐しい、苦しい嶮山の中腹を、岩の陸や、苔の上を辛く通じて、たゞ一條の細い道が北から南スパルタの方を通じ



て行く。一足ふみはづせば断崖絶壁を轉げ落ちて、悪魔の舌のやうな波に呑まれ去るの外はない。長さが約一哩、よしや何の妨害もなくとも、百七十萬の大軍が通過するには恐しく永い時日を費さなければならぬのであつた。

眼中すでに全ギリシアを呑んだヘルシアの大軍は、この堅固な要塞も、何の苦もなく通過しようと思つたのであつたが、もとよりその目算はがらりとはづれた。この天嶮に加ふるに、大岩石を利用して、敵を展望するに都合よくつくられたスパルタの陣營は、全ギリシアの運命を双肩になつた決死の精兵によつて守られてある。如何なる天魔鬼神といへども、どうしてたやすくこの難關を突破する事が出来ようぞ。スパルタ王レオニダス以下八千の將士は愛國の志氣に輝き渡る眼を上げて、北にひろがる平原を、雲の如くに襲ひ来るヘルシア軍の陣容をのぞみ、ひそかにわが腕をためすの時の近づくを喜んだ。

ヘルシア軍はやがてテルモピレーの要塞に近づいたが、仰ぎ見て、今更のやうにその堅固さに呆れ返つた。試みに岩をよち、足をふみしめつゝ越えるにし

ても、優に數日を要する難路である。しかも途中には、血に燃えた命知らずのスパルタ兵が、又を磨いて待ち構へて居るのだ。流の石大軍も成す所を知らず空しく五日を北山麓の平原に露營して、如何にしてこの堅壁を攻撃すべきかに考へあぐんだ。

雲霞の如き大軍が、眼の下數里の間隙間もなく押し寄せたこの凄しい光景をカリドロモス山の中腹なる自分の防禦陣地から展望した時、ギリシアの運命を双肩に荷つたスパルタの勇士の胸には、どんな感想が湧き上つた事であらう。「美しくも勇しきわが祖國ギリシアよ！我はわが劍と楯を振つて、最後の血の一滴までも、汝の祭壇の前に絞るであらう。」

悲壯の氣は全軍に満ちて、思はず彼等の眉は上つたのである。來らば來れ！ヘルシア百萬の大軍よ！

空しく五日を露營に過して、手のつけやうもない險路にあぐんで居つたヘルシア軍も、いつまでもその儘で過す譯にはいかぬ。よし！猛然立つて一舉にこ



の險要を奪ひ、つゞいてギリシア全土をふみにじらんご、漸く決心の膽をかた  
め、メデア地方兵先頭となり、轟然に突撃を開始したのである。  
蟻の如く平原を密集して進み来る敵の大集團を見るこ、スパルタ兵の意氣は  
茲に天に冲した。かねて期したる武夫の、手籠の程を思ひ知らせんご、地の利  
に據つて防戦頗る目ざましく、凄しい喚聲と劍戟の響が、濛々地峽をた  
て罩めたが、數時の後、あはれやヘルシアの大軍は、散々に打ち破られて、又  
もや平原の真中に追ひ返されて了つた。慌しく暮れ行く夕陽の、血のやうに  
紅い空は怖れを帯びたかのやうにふるひ戦き、平原に逃れたヘルシア軍は影の  
如く黒く、たゞテルモビレーの要塞上、血を見てたけるスパルタ勇士の眼さ、  
ふりかざした矛の鋒尖が、夕日を浴びて物凄く照り輝くのであつた。  
しかし、ヘルシア軍も、只一度の失敗では容易に手を引かぬ。更に今度は一  
萬の決死隊を組織して、遮二無二スパルタ軍を追ひ拂はうと試みたが、又して  
も必死の抵抗にあふて意久地なく撃退せられて了つた。

再度の襲撃は物の美事に追拂つたが、そして兩軍の意氣は層一層血のやうに  
燃えたが、しかもこのスパルタ軍にも亦多少の損害はないでもなかつた。傷く  
者、死ぬ者、——勇しい、戦友の倒れた姿は、矛を執つて馳せめぐる勇士の眼  
に映つて、涙を催さしめる事も度重つた。「祖國よ！我はかくして友の亡骸を  
ふんで戦ふなり」。何等痛烈鬼神を泣かかせるの言であらう！テルモビレー  
の陣營は、今や勇壯を越えて漸く悲痛の色を帯び初めた。  
その上、糧食にも追々不足を感じ始めた。武器も破損して用に足たぬのが  
多くなつた。レオニダス王は止むを得ず、數度使をスパルタの市に送つて、軍  
隊及糧食の補充を要求した。  
時！この時！この勇敢なる死守も終に破られ、レオニダス以下スパルタ  
全軍を死地に陥るべき一大災厄は忽然として現はれた。一大災厄さは何？  
ギリシア軍中の一兵士、エフィアルテスのヘルシアへの内通即ちこれである。  
勇しきスパルタは遂に腐れた一賣國奴のためにその死命を制せられたのである



四 噫！月下に苔むす記念の石碑

本國に向つて要求する應援隊も糧食もつかぬ。前面の敵は目に餘る大軍である。勇氣に逸るギリシア軍の頭上には、早くも呪ひの雲が降りかゝつたのである。噫、當時を思ふもの、誰かこの苦衷を思ふて涙下らぬものがあらう。しかも尚傾く運命の末路は、エフィアルテスの内通によつて、急速に、悲壯に迫つて來たのである。

雲戦く一日の曉、カリドロモスの山上（レオニダス本陣の裏）に陣取つて居たギリシア方のフォーキス兵一千は、まださめやらぬ露營の夢を、何者かの激しく射出した矢の響に、あはたゞしく破られた。

素破！と許りに立ち上るさ——驚くべし、ヘルシア軍の大部隊は、何時の間か探り知つたか、カリドロモスの間道を攀ぢ登つて、朝霧の晴間を堂々さ味方の背後を襲はんとして攻め寄せつゝあるではないか！これぞ即ち賣國奴エ

フィアルテスの内通により、ヘルシア王クセルグセスが、配下の勇將ヒダルネスに命じて、間道よりひそかにレオニダス本陣の背後（即ちテルモビレーの南側）にまはらせ、前後より挾撃にせんとする計畫であつたのである。

フォーキス兵は、戦ふよりも先驚き周章をふためいた。そして間道を扼して敵を味方の背後にまはさぬやうにすべき任務を忘れて、山の高所に駆け上つてそこに陣立を整へた。けれども、ヘルシア軍の目的とする所はフォーキス兵を撃破するのではない。ヒダルネスは前途を遮るもののないのを幸ひに、山上に逃げたフォーキス軍にかまはず、山の麓をめぐつて悠々レオニダス軍の背後に迫つて行く。

山上のフォーキス兵は益々驚き、急ぎレオニダスの本陣に駆けつけて急を告げた。これを聞いたレオニダスの驚きはどれ程であつたらう。しかも彼は敢然として、突嗟の間に取るべき方針を決定した。守らんか、前後よりの挾撃には、如何なる難關も精兵も遂には敵手に陥るの外はない。退いてこの險要をす



てんか。何の地の利もない平原に寡兵を以て大衆にあたれば、これにて全滅は眼の前にある。如かず。時ぞ今なり。命の續かむ限りこの險路にたてこもり、祖國のため、全ギリシアのため、花々しく斬死せんにはさ。

この決心と共にレオニダスは味方の中より、スパルタ人以外の他國人に、懇々を説いて、空しく死を待つこの要關より去る事を命じた。残るは王以下三百のスパルタ人、並にこのスパルタ人の義烈に感じて、共に俱に死なんとする若干のテスピエー人のみとなつた。

死を眼前に控へて、猶且義に勇む三百の勇士は、將に風前の燈火の如きギリシアの北門テルモピレーの要關を死守せんとする。何等の痛烈。何等の悲壯。

しかも最後は刻々に迫つた。ヘルシア本陣は、背後にまはつたヒダルネスの軍に應ずるため、早朝より猛烈なる攻撃を開始した。決死の覺悟を固めたスパルタ軍は、これに應じて奮撃突戦、眼にあまる大軍を、或は斬り、或はつき或は岩角に追ひつめ、或は海中に突き落とし、息をもつがず戦ふたので、流石の

ヘルシア軍も多大の損傷をうけて旗色頗るわるかつたが、更に新手の兵を繰り出し、入れかへ、攻めたてた。

如何に決死の勇士さはいへ、鐵石でない限りは傷つき瘡れるものも次第に多く、弓はきれ、矢種はつき、槍は折れて、物凄、戰場は更に一層の悲惨を加へた。相つゞ戦友の最後を見たスパルタ人は、今は早やこれまでなり。いで潔く散らばやま、玉散る及ぬきつれて、レオニダス王以下、何れも喚き叫んで敵陣に突貫し、息をもつがせず、縦横無盡に當るを幸ひ、斬りたて薙ぎ立てた。今は早やレオニダスも、重なる負傷に身体の自由を失ひ、満身紅に染まりつゝも、最後まで部下を激勵し、己れも敵中に突入して、遂に入りみだれたる敵味方の真中に、ほまれある戦死をさげたのである。

主將戦死を見て、ヘルシア方は急ぎその死骸を奪はんとしたが、スパルタ軍の勇敢決死の働きは、美事に王の死骸を奪ひ返し、なほも難戦苦闘をつゞけた折しもあれ、この亂戦の背後にあつて、ドツと許りに関の聲が上つた。こ



れぞ、間道を越えたヘルシアのヒダルネス軍が、今や、死物狂に斬死せんとするスパルタ軍の背後に現はれたのである。

最後の時は来た。スパルタの勇士は顔見合せて淋しい微笑を洩らした。そして傷ける者を負ひ、又は手を引き、互に助け合ひつゝ辛うじて一つの丘の上に登つた。この悲惨なる残軍が、ホツと息吐く間もなく、勝に乗じたヘルシア軍は、怒濤のやうに丘を目がけて押し寄せた。死物狂のスパルタ軍は、剣を揮つて近づく敵を斬り伏せ斬り倒し、剣折るれば敵に組みつき、更に窮すれば齒を以てかみつゝ、最後の最後までも身性の振舞なく、遂にあはれや一人残らず、壯絶なる戦死を遂げ終つた。

死を以て守つたテルモピレーはかくして陥つた。勢ひに乗じたヘルシア軍は潮の如くギリシアに溢れ入つたのであつた。

時に前四百八十年八月。敗れたりといへども、千載の下、誰か當時を思ふて涙にくれぬものがあらう！ 美しく花々しき古戦場の一隅に、物凄く弔ひ顔を

る蒼白の月光に照らし出された一基の石牌の表には、血と涙に結晶した次の言葉が刻まれてある。

「旅人よ！ 汝スパルタに行かば、我等勇敢なる武士が、國命を守りて此處に戦死せる事を國人に告げよ。」



## 二 サラミス大海戦

(窮鼠却つて猫をかむアテネの大勝)

サラミス大海戦は、前章テルモピレーの陸戦につゞいて矢張ペルシア軍對ギリシア軍の戦である。たゞ、彼は、スパルタを主とした陸の戦、此はアテネを主とした海の戦だといふに過ぎぬ。だから、當時の形勢は、一切前章にゆづつてここにはさかぬ。

### 一 「アテネの將來は海にあり」

テルモピレーの要關を突破したペルシアの大軍は、雲霞の如くギリシア平原に雪崩れこんだ。力きたのむスパルタの主力が全滅した事さて、其後のギリシア全土は、見るも哀れな有様で、たゞ悍猛なペルシア軍の蹂躪に任すの外はな、暴風の如き大軍は、さながら木の葉を吹きまくるが如く、ギリシア全土を

席捲し去つて、遂にはアテネの首府アテネ市をもまた、くひまに占領して了つた。

ギリシア諸國は今や陸上の防備は悉く破られ、たゞ、海上に浮んだ三百隻の軍艦を命と恃むの外はなくなつたのである。

これより先、アテネにテミストクレスといふ英雄があつた。その母が外國人であつた爲、アテネの正市民になる事が出来ず、種々の侮辱を受けるのを残念に思ひ、奮發勉勵した結果、天授の才智は次第にその鋒先を現はして、終にアテネに於て重要な位置を占める人物になつた。テミストクレスは、何よりも先に、「アテネの將來は海にある」。さういふ説を固く持して、口を開く度毎に海軍擴張の急務を説いた。けれども、最初は、その説に耳を傾けるものさへなく、却つて嘲笑される位であつたが、やがて、ペルシアの第一遠征軍がギリシアに迫り、引きつゞいて第二遠征軍が襲ひ来るや、テミストクレスは益々自説を主張し、今にしてアテネの海軍を擴張せずんば、ギリシアは必ずペルシ



アの爲に征服のうき目を見るであらうとまで極論した。中には、随分激しく反對説を唱へるものがあつたが、テミストクレスの熱心は、さうくアテネの人々を動かして、ピレウスといふ處に軍港をつくり、二百隻の軍艦より成る艦隊が出来上つた。

丁度その時、果してテミストクレスが豫言した如く、千二百隻の大艦隊と百七十萬の大軍とを有するヘルシアの遠征軍は、只一もみまギリシアをさして押し寄せたのであつた。

## 二 オレオス水道の血の波

その時ギリシア方の海軍は、アテ子の百二十餘隻を中心として、その他の同盟國艦隊を合し、總數二百八十隻の軍艦を有して居た。この同盟聯合艦隊は、名義上スパルタの海將エウリピアテスを總司令官に仰いで居たが、實際の行動は、軍艦の隻數が多いの故、又、海軍の事に明るいので、アテ子艦隊の

司令官テミストクレスの意見によつて左右せられる事が多かつた。テミストクレス多年の主張は茲に愈々事實となつて、アテ子はギリシア諸國の海軍中、然頭角を抜き、且テミストクレス自身も多年の抱負を實地に運用する絶好の機會、——さいふよりも、實行せねばならぬ絶體絶命の機會に遭遇した譯である。

同盟艦隊は、テルモピレーの陸軍と聯絡を保つ爲に、三隻の軍艦をその間に於て、互にその状況を報じ合ふ事にしつゝ、根據地をオレオス水道（ギリシア本土と、東エウボイア島との間に挟まれた東西の狹長なる海峡）に於て、東より進入せんとするヘルシア千二百隻の大艦隊を待ち受けたのである。

ヘルシア艦隊は、これ亦陸軍と聯絡を保ちつゝ、次第に南に下つたが、途中大颶風にあつて二百隻の軍艦を失つた。けれども流石大艦隊のそれ位には風せず、丁度陸軍がテルモピレーの要關に押し寄せた頃、ギリシア艦隊の根據地たるオレオス水道の眞東にあたるトリキリ水道（エウボイア島のアルテミシオン



岬さ、その北對岸マガ子シア半島との間の海峡まで進入して來た。  
アルテミシオン岬には、かねてよりペリシアの哨兵が出張つて居て、ペルシア艦隊が威風堂々海を壓してトリキリ水道に入るや否や、一發の烽火は高く空中に打ち上げられた。ギリシア艦隊はこれによつて、愈々敵艦の近づいた事を知つたのである。

さてこの時、この大事な場合を前にして、思ひも寄らぬ論議が同盟諸國司令官の間に突發した。それは、僅か四分の一足らずの小艦隊を以て、ペルシアの大艦隊に及向ふのは、誠に無鐵砲であるが故に、一先、艦隊を南の方サラミス灣の西南、コリント海峡まで引き上げようといふ説である。ペルシア大艦隊の威風に恐れた諸國艦隊は、一も二もなくこれに賛成したが、テミストクレスだけは、陸軍との連絡上、又、北方諸國の庇護上、引揚説の不利なを知るつて大に反對した。議論は紛々として果てがない。流石のテミストクレスも、この反對説を破るのには大に困却した。

恰も、その時、トリキリ水道まで進入して來たペルシア艦隊は、その二百隻を分つて、エリボイア島の東より南に進み、水道の南端を塞いで、前後からギリシア艦隊を袋の鼠のやうに包圍して挾撃せんとする計畫をたてた。そして二百隻の艦隊は、早くも本隊に分れて南下した。

この事がギリシア方に聞えたので、退路を絶たれては致方がない。止むを得ず退却説は中止となり、さもかくもここに敵なくひこめる事に決定した。機先を制する事は軍事上の大得策である。ギリシア艦隊は、止つて居て敵の挾撃を待つよりも、先敵を襲ふて一か八かの奮闘を試みようといふので、船相啣んでオレオス水道を出で、四倍に近い敵艦隊の碇泊して居るトリキリ水道に進撃した。

これを見たペルシア艦隊は、生意氣な振舞只一討ち、海を蔽ふ許りの大勢が波をけたてて迎へ撃つた。ペルシア艦隊中の主力は、勇敢と巧妙を以て聞えたフェニキア人であつた。この時もフェニキア艦隊は、眞先に軸を揃へてギリ



シア艦隊の真中に突進し來り、日頃鍛へた腕前を、眼に物見せんさ猛り立つたが、ギリシア艦隊は巧にこれをさけ、反對に敵を包圍して、散々にこれを打ち破つた。

ペルシア方は思はぬ失策により、主力のフェニキア艦隊が破られたので、忽ちはじめの意氣込を失つて、列を亂して散々に退却した。折から、暮れ行く海の面は、うたゝ凄惨の氣を湛へ、寡を以て衆を破つたギリシア軍の勝利を祝ぐが如く、眞紅の太陽は西の方、はるかテルモピレーの方角に没し去つた。

その夜は稀に見る大暴風雨で、波はさながら大山小山の起伏する如く、地の利を占めたギリシア艦隊こそ何の障りもなかつたが、海中の深い波間に、正面から風を受けたペルシア方の驚きは一方ではない。怒濤に卷かれ、權を失ひ、沈没、破壊その數を知らず、又もや大損害をうけたのであつた。處が、ペルシア方の損害は單にこれのみではなかつた。先にエウボイア島の東を迂回して、ギリシア艦隊の退路を絶つべき任務を帯びて出かけた二百隻の艦隊は、涯なき

大洋の唯中でこの暴風に出會したから、無慘や一隻残らず海底の藻屑を消えて了つたのである。

ペルシア方はかくの如く重ねくの大損害を受けたさはいへ、もさく眼にあまる大艦隊、まだ決してギリシア軍に劣るどころか、優に三倍以上の勢力を保持して居たのである。よつて、前敗の耻辱を雪ぎ、且は敵をオレオス水道より追拂はんため、今度は反對に彼より出動して襲ひかゝつた。前の敗辱は油斷に基づいたさいふ事に氣附いたペルシア方は、慎重に且勇敢に、威風堂々としてギリシアの小艦隊目がけて攻め寄せた。

オレオス水道の狭い入口は、ここに至つて海若躍り、鮮血の波を漂はす修羅場さはなつた。ギリシア艦隊は依然勇敢に戦つた。けれども、充分の注意を保つたペルシア方の大艦隊の勇戦力闘も亦目ざましかつた。殊に、その主力たるフェニキア人の勇猛果敢は、はじめてギリシア人に十分にその腕前を示した。



両方ともに死力を盡して戦つたので、未だ勝敗の明かならざるに先立ち、日は西に沈んで夕の帷は重く戦場に湧き立つ波を包んだ。兩軍はここに一先陣を引いたのである。

この勇戦、この奮闘、三倍の敵に對して、常に優勢を持しつゝオレオス水道を固守したギリシア艦隊に對して、今までの苦心を水泡に歸せしめる悲報は、突如一哨艦によつて齎されたのであつた。何ぞ！ 彼等が常に聯絡を保つべく多大の苦心を拂つたスパルタ陸軍が、終にテルモピレーに於て全滅した報知である。テルモピレー陥らば、敵の大軍は潮の如く南下するに相違ない。然らば海軍がひさり北邊を頑守する間に、ギリシア全土は忽ち敵陸軍の蹂躪するところとなるであらう。ここに勇敢なるギリシア艦隊は、オレオス水道を空しく捨てて、南の方、アテネの南海岸、サラミス灣の本據に據るべく餘儀なくせられたのである。

### 三 「汝等たゞ木の壁によれ」

ギリシア同盟艦隊がサラミス灣に入つた時は、アテ子をはじめ南方の諸國は、ペルシア大軍南下の噂に驚き慌てて、只管恐れまどふ混亂の絶頂にあつた。殊に、ペルシアに對して前二回敗戦の耻辱を與へて居るアテ子市は、この度こそ復讐的に慘酷な處置にあふだらうと、恐慌の上にも恐慌を重ねて居た。

テミストクレスはこの間に處して、最早陸上の防備は頼むに足らぬから、全市民は市をすてて軍艦に來れさせ、かゝる目前の大事に迫つても、多年任み馴れた家を捨て、國土を捨てて海に浮ぶ事は、人民の何さしても忍び難い至情である。それがために、混亂を重ねながらも猶海に來つて防戦を謀るものは數少ない。

かゝる中にも一方ペルシアの大軍は、恰も無人の野を行くが如く、ペルシア



全土を席捲して、アテ子の近傍にまで攻め寄せた。今は決断に迷つて猶豫する時ではない。テミストクレスは即ちアポロの神の神託を受けて、最後の手段に出ようか決心し、使をデルホイのアポロ神殿につかはして神意を伺はせたが、その神託に曰く、

「他に施す術なし。汝等唯木の壁によれ。」

さあつた。「木の壁」さば即ち軍艦である。速かに國土を捨てて、運命を軍艦に托せよ。テミストクレスは一生懸命に説き廻つたので、流石迷ひに迷つた市民も、神意を体してさうくアテ子市を捨てた。

あゝ、この時、サラミス灣内にあつたギリシア同盟艦隊は、總數約三百五十隻。ギリシア全土の生命と名譽とは、この僅か三百五十隻の軍艦に托されたのであつた。何たる悲痛の事實。萬一この艦隊にして、灣口に迫り来らんとする六百餘隻のペルシア艦隊に撃破され終らんか、歴史と國土とに花やかなる榮譽になふギリシアは一朝にして世界の青史より抹殺せられなければならぬの

である。

アテ子市民は神託によつて辛くも海に浮べる事が出来た。テミストクレスがホツと一息吐く間もなく、今度は又同盟艦隊中に困難な問題が湧き出して来た。即ち、諸國艦隊司令官は、例の臆病風に襲はれ、ペルシア陸軍の威風凛々、今にも、サラミス灣口に迫らんとする大艦隊の猛威に怖氣立ち、かくの如く形勢の我に非なる時、このふくろの如きサラミス灣にたてこもつて、眼にあまる大艦隊を迎へんとするのは、坐して自滅を待つに似たものである。況んや、この同盟艦隊は、ひざりアテ子の爲のものではなく、ギリシア全土の運命を乗せたものではないか。如かず敵艦隊の來襲に先立ち、この灣内を逸出して、コリント海峡の廣い海面に據らんには。さういふ説が起り、他の司令官は皆これに賛成したのである。

サラミス灣を逸出せんか。臆病風にさそはれた諸國艦隊は、戦ふよりも先に隊伍をさいて散々に逃げ去るに違ひない。ギリシアの運命はその時如何成



り行くか。テミストクレスはむしろこのふくろの如き灣内に同盟艦隊をこりまこめて、死物狂に戦ふ事が、却つて得策である事を熟知して居たので、コリント退却説に對して極力反對した。けれども寡は衆に敵せず、如何程利害を説き、又如何程熱辯を振つても、司令官會議は依然退却説が重きを成した。

時 恰もペルシア陸軍は、アテ子市を完全に占領して、市民の故郷なるその市街に火を放つた。焰々たる猛火は全市を包んで、陸上のアテ子は全く亡び行く。同時に陸軍と聯絡を保つたペルシア艦隊は、威風堂々サラミス灣口に押し寄せた。陸も海も、我に數倍する優勢なる敵である。我は唯三百餘隻の艦によつて、ふくろの如きサラミス灣内に漂ふのみ。しかもその艦隊中には、今頼りに退却説が主張されて、意氣は全く沮喪しつゝあるではないか。當時テミストクレスの感慨果して如何であつたであらう。

併しながら、今は是非を論ずる場合ではない。テミストクレスは遂に、味方

の意氣を統一して、この小弱の艦隊を以て、乾坤一擲の戦を試みんため、ここに辯舌を以て説くの迂をすてて、反間苦肉の計略をさつた。

テミストクレスの使が、一日ひそかにペルシア王クセルクセスの陣營についた。そして王に向つて、次の如きテミストクレスの傳言を述べた。

「テミストクレスは今や、ギリシア艦隊のために戦ふ心なく、ひそかにペルシア方に降らんとして居る。それについては、早くサラミス灣口を塞いで、一擲にギリシア艦隊を撃滅し給はん事を大王に奏上する。ギリシア艦隊は今や士氣全く沮喪して、さても大王の大艦隊を相手にして戦ふだけの勇氣はない。撃滅するなら今の間である。テミストクレスも、戦の最中になれば、必ず大王方に味方して、ギリシア艦隊を突き破るであらう。」

これ果してテミストクレスの眞意か。何はともあれ、クセルクセス王は大に喜び、直ちに全艦隊に出動を命じて、サラミス灣口はきびしく封鎖され終つた。



テミストクレスの苦肉の策は成つたのである。臆病風に誘はれた諸國司令官といへども、退却の道を塞がれて、袋の鼠となつては最早議論の餘地はない。この上は一致協力して死物狂に最後の運命戦を試みるより外にさるべき手段はない。沈滞し、沮喪したギリシア全艦隊の士氣は茲に忽ちよみがへつて、物凄く殺氣を帯びて來た。

世界海戦史の最初の頁を紅く彩るサラミス海戦は、かくの如き状態の下に落日の感ある全ギリシアの運命になへる同盟艦隊の、決死の覺悟によつて今やその火蓋を切らんとする。灣内の波、風なきに騒ぎ、三百餘隻の艦船からは、將に滅亡に垂んざした全土を熱愛する將士の意氣が、限りなく重く且限りなく大なる責任に醺酔した士氣が、海面を壓して凄しく立ち上つて行くかのやうである。

窮鼠！ 眞に窮鼠に似たるギリシアの運命は今やこの最後の戦に托せられた。

#### 四 決死の勇戦全土の危急を救ふ

兩艦隊の意氣込はすでにこれを説いた。さて、ギリシア艦隊が必死の覺悟を極めた如く、アテ子の人民も亦この一戦に魂を打ちこまぬ譯には行かなかつた。萬一味方の敗戦に終らんか、彼等は忽ち行くに處なく、告ぐるに人なき敗殘國民ならなければならぬ。そこで愈々海戦はじまらんとする頃には、海岸のあたりや山の中腹に、これ等の人々は一齊に、不安の胸を轟かしつゝ、同胸艦隊の行動を凝視して居たのであつた。ここに於て、ギリシア艦隊の責任は又一の重さを加へたこととなる。國の爲のみならず、「同胞のため」、こゝろ新しい感概は、たゞさへ燃え立つた士氣の上に更に新しい油を注いだ。

ヘルシア王クセルクセスは、戦の前日、味方に告げて曰く、  
「予は明日エイガロスの山頂にあつて、汝等の行動を瞰視するであらう」。  
さ。果して當日は灣にのぞんだエイガロス山の頂に、銀の椅子をすてそ



の上に坐し、只一に戦況を眺めて、味方の行動を監視した、故を以て、ヘルシア方は、もしも昇怯の振舞あらば、王の怒りにふれん事を思ひ、進んで王の面前に大功名を立てて、後日の恩賞にあづからんさ、これ亦意氣は天に冲した。

いよ／＼西暦紀元前四百八十年九月二十日の太陽は、朝靄こむるサラミス灣の東に昇つた。ペルシア六百隻の大艦隊は、堂々三列の横隊をつくつて、サラミス灣口さしてひた寄せに押し寄せた。例によつて主力のフェニキア艦隊は最右翼に位し、他の諸國艦隊が、中央及左翼をかため、その勇猛にして殺氣立てる事は軸に蹴立てる白波の渦巻くのにも知られた。

これに對するギリシア方は、テミストクレスの計略により、主力たるアテ子艦隊を最左翼とし、スバルタ艦隊を最右翼として、その中間に諸國艦隊を置いた。主力のアテ子が左翼にまはつたのは、先敵の右翼にあるフェニキアを撃破すれば、敵の意氣は忽ち沮喪して、大に混亂を來すであらう。それに乘じて中央より左翼にかけて壓迫を加ふる時は、敵艦算を亂し退却するに相違な

い、といふテミストクレスの豫断によつたのである。

幕は落ちた。悲壯なる軍歌の聲は海面にひゞいて、兩國の運命を托したサラミス海戦の幕は落ちた。

果してテミストクレスの考へ通り、フェニキア艦隊は、他に先んじて、鋭く、衝角に白波をけたてて、真先にペルシア艦隊目掛けて突進して來た。占めた。さ許りテミストクレスは、一聲高く自國の艦隊に令を下して、猪のやうに猛り狂ふて來たフェニキア艦隊の中央目掛けて逆様に突進した。愈々兩艦隊が接近するや、波は躍り、旗は狂ひ、矢は飛び、劍は舞ふ、未曾有の激戦は始つた。敵も味方も運命を賭して戦ふのだから、悲絶、慘絶、面も向けられぬ血戦さになつた。

フェニキア艦隊とアテ子艦隊とが衝突して、火花を散らして戦ひはじめると全艦隊も殆んど一齊に戦を交へはじめ、サラミス灣は忽ち腥風吹き荒ぶ修羅場さ化した。死力をつくすアテ子艦隊は、フェニキア方の正面から攻撃するこ



共に、その側面へも廻つて、左右からこれをもみ立てた。舷さ舷さは接してはなれ、はなれては接した。フェニキア艦隊の旗艦には、司令官さして、クセルクス王の弟アリアピグ子スが坐乗して居た。これぞ知つたアテ子の一艦は矢庭に軸を立て直して眞一文字に旗艦の艦腹目がけて衝突した。アッ！ さいふ間もあらせず、するどき衝角は、艦腹を穿つて大孔をあけた。水は瀧の如く旗艦に浸入した。かくさ見た司令官アリアピグ子スは、無念の形相凄じく、部下を率ゐて、舷を越えてアテ子方の軍艦に襲ひかゝつた。暫くは、艦上、右往左往の混戦を演じたが、遂に、司令官はじめ、旗艦乗組の将卒は、敵艦上に壯烈なる戦死をさげた。

司令官戦死、旗艦沈没と見たフェニキア艦隊は、今迄の勇戦奮闘にも似ず意氣沮喪して旗色聊か怯んで見えた。得たり。さアテ子方は、陣形を揃へて面もふらず突撃し、或は突沈め、或は撃沈し、散々に敵を追ひつめた。フェニキア艦隊は、亂れかけた戦列を立て直す間もなく、前面よりは疾風の

如きアテ子艦隊は駈け破られ、背面よりは、猶も先を争ふて前進せんとする味方の軍艦に押し沮まれ、進退度を失ふて、陣形シドロモドロに混乱した。

主力のフェニキア艦隊すでにかくの如き有様である。他の諸艦隊の陣形も次第に崩れそめて、船と艦、人さ人さ、狭い灣内に入りみだれ、我勝ちに先を争ふて逃げまはる有様となつた。

エイガロス山上のクセルクス王の顔は次第に曇つた。椅子を乗り出して灣内を瞰すさ、今や、味方の艦隊は、投げ散らした様に散亂して、勝に乗じたギリシア艦隊は、艦列を揃えて縦横無盡に奮戦しつゝあるではないか。王は拳を握つてこれを凝視した。

さ見る。この大血戦の唯中に、一際目立つ大艦の、軸に女王旗をひるがへしたのが、一アテ子艦の爲に追ひ立てられて、電の如く逃げ走るのが見えた。これ、かねてよりクセルクス王の覺目出たき、一植民地の女主アルテミシアの旗艦である。王は瞰をこらしてその行動を注視した。さころが、アルテミ



シアの旗艦が、二直線に遁走する前面にあたつて、丁度味方の大型軍軍が一隻浮んで居た。ハッと思つたが止る間も何もある筈がない。旗艦の衝角は忽ち味方の軍艦の艦腹を、勢凄じく蹴立てた波濤の渦巻と共に突き破つた。驚く間も救ふ間もあらず、突き破られた軍艦は忽ちそこに沈んで行く。旗艦は、後より敵に追撃される、苦し紛れに、沈んだ軍艦の上を突走つて真直に逃げ出した。

山上よりこの様子を眺めたクセルクス王は、よもや味方の軍艦を突き沈めた事とは思はず、その機敏と勇敢さに思はず讚嘆の聲を上げた。

かくする中に、ペルシアの艦列は全く亂れた。右に行くもの、左に行くもの血眼になつて叱咤する艦長の號令もみだれ勝になつた。拵から、ギリシア方にさつては、これ亦天の佑なるか。正午頃より俄かに吹きそめた西風は、只さへ浮足立つたペルシア艦隊を、海外へへくさ吹き捲つた。狭い灣口は、逃げ出さんとするペルシアの軍艦によつて埋められ、芋を洗ふ如き混雑となつた。

時こそ今も、灣内に列を揃へたギリシア方は、荒波さわぐ海面を、満身の力を振つて潜ぎ進み、息をもつがせず亂軍の敵を攻め立てた。流石のペルシア大艦隊も、風上より整然とした攻撃に逢つては一溜りもない。或は沈み、或は捕へられ、二百餘隻の軍艦をここに失つた。

この様を、手に取る如く眺めたペルシア王の感は果して如何であつたであらう。

日は没した。折からの宵月夜、ギリシア艦隊は尙も追撃の手をゆるめず、遂に、サラミス灣口を離れて、はるか北方なるフロレン灣にまで敵艦を追ひつめ、この上は大丈夫と、快げに凱歌を奏して、もこのサラミス灣に引き上げたのであつた。

あゝ！ 静かに更け行く新戦場の月夜よ！ 波濤おさまつて、月光柔かく浪に落ち、數限りなく浮び漂ふ木片や屍體を明らかに輝らし出した。運命を晴した光榮ある海戦に、最後の勝利を得た勇敢なるギリシア艦隊は、隊伍堂々



月下の波を碎いて、永遠に忘れ難き名譽に飾られたサラミス灣内に進み入る。

——當時將士の感慨、思ひやるだに壯烈の極みである。

クセルクセス王は、この一戦の打撃によつて、事志に合はぬのを憤り、俄かに兵を擧げて歸國の途につくべく、陸海軍に令を下した。奮脚の如くギリシア全土を席捲した陸軍も、止むなく占領地を打ち捨てて本國に引き上げる事となつた。

憂愁の雲につままれたギリシアの國運はここに再び開けた。テルモピレーの血戦、サラミス灣の大捷、共にギリシア魂の、最も華やかに發露したものである。將に萬世に匂ふ花かつらの感があるではないか。

### 三 項王最後の戦

〔驪不逝、虞兮虞兮若奈何〕

#### 一 二雄先を争ふて秦都に向ふ

秦の始皇帝は、安房宮を築いて美女三千を侍らせ、詩歌管絃、酒池肉林の榮華に耽る傍、珍書を集めてこれを焼き、四百五十人の學者を坑に埋め殺し、尙萬里の長城を築く爲に幾十萬の民衆を、數年の永きにわたつて酷使する等の暴政を施したので、はじめその隆々たる勢力に壓せられて居た諸侯の心も、次第に秦を離れはじめた。

始皇帝歿して、二世皇帝立つや、暗愚にして、到底君たるの資なく宦官趙高といふもの、權を専らにして、遂に秦の皇讓を奪つて專横至らざるなく、安房宮の空には、妖雲低く垂れ下る有様となつた。

心 既に秦を離れた諸侯は、俄然、矛を倒にして秦に叛いた。その中に特



筆すべきもの、即ち、其の項藉(項羽)の擁立した懐王で、懐王は、その臣、項羽、劉邦の二人に命じて、長驅、秦の都咸陽を衝かしめた。物語の發端は即ちここに萌す。

項羽は豪邁果敢、矛をさつて立たば將に百萬の軍兵も眼中にない勇猛の將劉邦はこれに反して、寛仁大度、人をしてその徳に懐かしめるの器量があつた二人は懐王の命を奉じて、二手に別れて、別々の道より、秦の都に向つた。二人の中の何方にもせよ、先秦の都を陥れたものが、秦の關中(函谷關)によつて劃せられた一帯の地、咸陽もその中にある)の王となるべき約束であつた兵力よりいへば、劉邦は勿論項羽の片腕にも足らぬ程であつたが、秦の都へ向つた前進の路に於て、敵の抵抗と難道とが少かつたため、項羽がまだ東の方で戦つて居る間に、劉邦は早くも秦都の入口を扼する函谷關を打ち破つて、咸陽の城下に押し寄せたのであつた。

當時、咸陽では、趙高ひそり權を恣にして居つたが、雲霞の如き劉邦の

大軍にそり圍まれ、意久地なくも、二世皇帝を害して、俄に秦皇室より三世皇帝子嬰をあげて帝位を襲はしめた。子嬰は早速秦室に讐なす趙高を誘ひ殺し將を遣はして劉邦の軍を防がしめたが、もそより傾きそめた運命は奈何ともなし難い、劉邦の軍は大にこれを破つて進んで霸上に至り、使を子嬰の許につかはして降参をすゝめた。この優勢なる敵を引き受けては、すでに策の出づるころはない。子嬰は在位僅かに四十六日、素車に乗り、白馬を先立てて、悄然さして劉邦の軍門に降つたのである。秦一世の榮華、幻の如く茲に消え失せたのであつた。

劉邦の軍は確實に咸陽を占領したので、約束通り、劉邦は秦王の位につき事となり、秦の人民を集めて、苛法を改め、自由をあたへる旨をさき示し、庫を封じて、部下の兵士にみだりに掠奪する事を戒め、自身は霸上に在つて關中を治めた。今まで悪税と苛法に苦んで居た秦の人民は、忽ち劉邦の徳に歸服して了つた。



一方項羽は、優勢なる秦の大軍を引き受けて、忽ちこれを打ち破り、猛虎の月に嘯くが如く、威風堂々秦都に向つたが、函谷關に近づくと、こはそも如何に、關を守るものは秦の兵にあらざして劉邦の部下である。さては劉邦はすでに關中に入つたか。我こそ先んじて秦の王位を得んと思ひしに、劉邦如きに先立たれたるは無念千萬、いでやこれより一もみに劉邦を攻め滅し、秦王の位を奪ひ取らんぞ、勢にまかせて、無二無三に守備を破り、潮の如く關中に雪崩れこんで、鴻門にその陣を構へた。兵數實に四十餘萬、霸王の劉邦に比して殆んど四倍にあつた。

項羽方の參謀に范增といふ者があつた。つくづく形勢を按じて、一刻も早く劉邦を攻め滅さん事を告げた。ところが、同じく項羽方の、項羽には叔父にあつた項伯といふもの劉邦の參謀張良と友誼あり、ひそかに霸王に赴いて項羽の意のあるところを告げ、猶豫すれば、劉邦は攻め滅され、張良も殺されるであらうから、今の間に遁け去れよとすすめた。張良は流石に主君をすてて遁け

去る如き不信の事はせず、項伯をしいて劉邦に面會させた。劉邦は細々事情を述べて項羽の誤解の解けむ事を願ふたので、項伯は、さもかくも一度項羽に逢ふて、意志を疎通せしむるが得策であらうと建言した。劉邦もその意をくみ茲に自ら、鴻門にある項羽の陣中に行き、親しくその誤解をかかむとした。これ即ち有名なる鴻門の會で、二雄の反目はこれより益々増大せんとするのである。

## 二 宴中の劍舞

約の如く劉邦は、翌日僅かに百餘人の護衛兵を従へ、霸王の陣より、項羽四十萬の軍兵の屯せる鴻門に向つた、これより先、例の項伯は、急ぎ歸つて、項羽に、劉邦は決して項羽に對して敵意を持つて居るものではなく、明日は自ら鴻門に来て、意志の疎通を圖るのであるから、必ず疎畧のないやうにさ、くれぐれも注意をしておいた。これによつて、流石、勇猛果敢、短氣一徹の項



羽も、幾分敵意を柔けて、出来得べくんば兵を動かさなく、談笑の間に自分に利益ある結果をおさめんと思慮した。

劉邦の一行は鴻門についた。陣營の前には、刀を提げ、矛を捧げた項羽の軍兵が、物々しく整列して一行を迎へ、先その膽を奪はんとした。げに劉邦のここに来るや、自己に利ある談判を試みて、萬一項羽の怒にふれんか、その一命を賭して争はなければならぬ。身を全うせんすれば、即ち自己に不利益なる條件に屈服しなければならぬ。誠にこれ、玉を抱いて淵に臨む、危機殆んど累卵の思ひがあつた。

項羽は内心の憤怒と欲望を抑へて、快くこの珍客を迎へた、酒宴は先はじまつた。項羽の側には、例の參謀范増が控へ、劉邦の傍には張良が坐つた。項伯もその場にあつた。酒宴は談笑の間にはじまつたが、内心劍を磨く項羽方と、萬一を氣づかふ劉邦方とは、互に寸分の隙なく、その一舉一動、一言一行にも、多大の注意を怠らず、さながら劍の刃を渡るが如き危ふさを感じたのである。

劉邦は先、

「自分が關中を占領してからは、決して自ら王となるの意志はなく、庫を封じ掠奪を禁じて、只管貴軍の來るを待ち暮して居た。函谷關を守らせたのは、只盜賊などの出沒を防ぐ爲に過ぎない」。

と告げて、只管項羽の歡心を得ようさつさめた。流石に項羽もそれ以上追究の言葉もない。よしやここにて一刀の下に劉邦を討たずとも、機に應じて、正々堂々の陣を張る時は、優勢なる我軍は一撃の下に劉邦の軍を粉碎し終るであらう。そして今日何等の口實もなく彼を討つには及ぶまい。と考へて、それより談は一層親密に、これが内心蛇の如くいがみ合ふ敵味方とは思はれない程であつた、圖られざるは人世の變轉である。この絶好の機會を逸した項羽は遂に劉邦の爲に身を滅ばすの止むなきに立ち至つたのであつたが。神ならぬ身の當時些もその點に氣附かなかつたのであつた。



項羽は氣附かなかつたが、その臣范増は、早くもこの點に着目し、この絶好の機会を逸しては、再び劉邦を討つのは至らぬであらうと、しきりに項羽に目配せして、早く劍を抜いて立てさせき立てた。ところが項羽は一向に應ぜぬのみか、二人の對話は益々關係のない方面にのみ花を咲かせて行く。范増は主君の決断に乏しい事を憤るあまり、遂に席を立つて、別室に入り、項莊といふ者を呼んで、餘興の劍舞に事よせて、隙を覗ひ、一撃の下に劉邦を討ち果すべく命令した。

項莊はやがて、長劍を提げて宴會の席に入り、氷の如き刃を振りかぶつて、劉邦の様子をぬすみ見しつゝ、右に左に、前に後に、或は近より或は離れ、靜々として舞ひ踊る、——危いかな。隙あらば劉邦の命はその長劍の下に絶たれるのである。敵も味方も手に汗握り、樂しき宴席には一道の殺氣雲の如くに立ち上つた。

項伯は直にその計略に氣づいて、自ら劉邦を庇はんが爲、己れも劍を抜い

て立つた。二人の劍は電の如く、右に左に舞ひ狂ふ。項莊が劉邦に近よらんとすれば、項伯はその前に立ちふさがり、互の眼は、これ亦電光の如くうかがひ合つた。

事態容易ならずと見てまつた張良は、ひそかに急を門外に待てる猛將樊噲につけた。かくと聞くより樊噲は、勢凄じく護衛の兵士を突き倒して、宴會の席を目がけて突進した。

劍の舞は今眞最中、二人の血走る眼は益々殺氣を帯び、又は恰も電光の如く、危機正にこれ一髪の間！

突如！宴席の入口なる幕を片手に押し上げ、楯を挟んだ樊噲が、頭髪を逆て、鬚を怒らし、血走る眼物凄く、ハツタさばかり項羽を睨みつけた。その恐ろしき威風に、項羽も思はず縮み上つた。項莊も項伯も又をおさめた。

樊噲はそれより酒をあふつて、項羽に向ひ、諄々として、劉邦を敵視する事の不道理なるを説いた。これで折角范増の計略も空しく水泡に歸して了つた



暫らくの後、劉邦は、厠に立つやうすで、ひそかに樊噲をつれて霸上に歸り張良をして、無禮を謝せしめ、玉と盃を項羽と范増とに贈つた。項羽はその玉を黙つて受取つたが、范増は盃を受取るに共に、劍を抜いてこれを叩き壊し天を仰いで歎じく曰く、

「あゝ、豎子語るに足らず。後日天下に號令するものは必ず劉邦ならん」。不幸にしてこの歎息の過らなかつた事は、後にこそ思ひ知られたのである。

### 三 忠臣命を擲つて君を救ふ

鴻門の會は范増の長嘆と共に終つたが、項羽の勢力は、その軍兵の衆にして且勇猛なると共に、日に月に増大した。彼は先咸陽に入るに子嬰を殺し、宮室を焼き、始皇の墓を發き、秦の寶物や美人を奪つて自分の故郷なる楚國へ送る等、あらゆる暴虐を行つた。ために、兵力の強大なるに似ず、人民の望は次第に失墜した。

次に項羽は、前約にそむいて、劉邦をして關中の王たらしめず、僅かに、巴蜀、漢中の三郡を與へて、漢王の名稱を用ひしめた。而して、己れは自ら立つて楚王となり、専らその威權を振つたのである。

漢王は、蕭何、張良、陳平等の謀臣と、韓信とよぶ勇將とを抱いて、恨みを呑みつゝ、時の至るを待つた。

項王は四方を征して百戰百勝、何人もよくこれに抗するものなく、朝日の昇るが如き威勢となつた。

漢王の謀臣蕭何は、策を漢王に奉つて、滎陽城に據つて楚王項羽を滅さんとした。數年來の屈辱をはらすは眞にこの時にあり、張良陳平は内にあつて謀をめぐらし、韓信は外にいて屢々敵を惱ませたが、不幸にして漢軍敗北、滎陽城は十重二十重に楚軍のために包圍された。

この時漢王の臣に紀信といふ者あり、漢王に代つて、王車に乗りこみ、僞つて楚軍に降参した。漢王は辛くもその隙に滎陽城を落ちのびた。



項羽はそれを知つて大に憤り、直に紀信を焼き殺し、直様漢王を追ひ撃つた。もさより小勢の事さて、漢王は到る處に敗戦を重ね、遂にその將韓信の許に身をよせた。かつては項羽と相並んで秦を討つた身の、さりさては果敢なき身の成行ではないか。

その後、漢王は、韓信をはじめ、諸將の勢力によつて稍その勢ひを盛り返したが、これに反して項王は、范増をはじめ、主なる諸將を失つて、幾分當時の勢力力を殺がれた。

機乗ずべしと見た漢軍は、しばし出でて楚軍を悩ませたので、項王も遂に風して、天下を二分し、鴻溝(今の汴州)以西を漢王にゆづり、自ら鴻溝以東の地を領して、我は東に歸らん、君は西せよと、兵を率ゐて東歸の途についた時！ この時！ 漢王一代の風、辱はこの時にはじめて雪がるべき絶好の機雲に際會した。即ち、謀臣張良陳平は、主君に策を獻じて、項王との約にそむき、突然西歸を中止して、今將に兵を率ゐて東歸の途にある項王を、不意に垓

下に攻め撃つたのである。悲壯なる本篇の眼目は、即ちこれより展開せんとする。

勇猛絶倫なるもの必ずしも最後の勝利者たらず。蕭何、張良、陳平、韓信の諸名將を有した漢王は、唯一の謀臣范増を失つた項王と、その最後の一戦において勝を制した。げに君臣水魚の感はここに至つて一層痛切ではないか。

#### 四 夜深うして四面楚歌の聲

數次の戦に疲勞困憊した軍兵を率ゐ、暴虐によつて民望を失つた項羽は、なほ抑へ切れぬ勇猛の意氣に、腕をさすり、天を睨みつゝ、かつては、その馬蹄にかけて踏み荒らした江西の地をふりかへり勝に、漢王に約した如く、東、故郷の楚をさして歸途についた。馬に拍車をあてて、阿修羅の如く陣頭をかけためづつた雄姿に比して、たさひ、人心を集める才に乏しかつた爲さはいへ、今の姿の、何さなく影寒く、暗い運命を暗示したもののやうに思はれ、自らその



妄想を打ち消さうとつとめるものの、淡い落膽と恐怖が、その鐵の如き胸にうるさくもつきまこふた。

一軍肅として聲なし。馬蹄のひびき憂々として耳に通ふ。暗い影を伴ふた一軍は、恐しい沈黙の儘に東へくさ進んだ。

東、楚の空は曇つて見える。わが行く道は黄土に打ちつゞく平原の泥濘である。錦を飾らむとした故郷に、敗戦の汚名こそ一度もなけれ、見えぬ重傷を胸に受けて、しかもなほ青雲の志止み難き英雄は、今、足の運びも重く歸らんとする。秦の討伐、鴻門の會、天下一統、……思へば武威あたりを拂つた過去は美しい夢であつたか。否！これよりも、わが鋭き鋒尖に敵する何者かあらう！然り今後と雖も、項王は依然天下の武王ではないか。光り輝く戦勝の霸王ではないか。彼は曇れる眉を開いて、鋭く天の一角を睨んだ。

一軍は肅として黄土の道を東に歩む。重い足音、入り亂れたる馬蹄のひびきそれ等につきまこふ道へども去らぬ暗い運命の影。

果してその暗い運命の影は、妄想にあらずして事實として現はれた。即ち、彼項王が、疲れたる一軍を、多からぬ糧食を以て垓下に陣した時、約に背いて後を追ふた漢王は、その精銳の兵を提げ、名將韓信、その他張良等の謀臣を率ゐ、先、固陵を畧守し、楚の大司馬を勤むる周殷を降して味方とし、突然垓下の陣を包圍したのであつた。

猪子才千萬！いで一揉みに。と、項王は怒髪冠をついて躍り上つた。瞬間憤怒の情は、劉邦の大人風な容姿と、共に秦に向つた時と、鴻門の會と、僅かに三郡の王に封じた事と、滎陽城のかこみとが、走馬燈のやうに腦中を回轉するに共に、忽ち侮蔑と嘲笑に轉じ、更に轉じて、今昔の感、その位置を逆にしたやうな昔と今に思ひ及ばして、混亂した心情は切齒となつて外面に洩れた。

今の今まで悔り切つた劉邦に、うまくと謀られたかと思ふと、矢も楯もたすらぬほど苛立つた。何程の事かあらん。只一もみにかこみを蹴ちらせ。と、



連戦連勝の名譽を共にした名馬騷に打ち跨り、陣頭に立つて軍兵を指揮し、阿修羅の如く奮戦したので、漢軍は流石に恐れて手出しもせず、遠巻に圍んだまゝ糧道を絶つて項王を降さうとした。

もさより多からぬ糧食である。城中は次第に餓を訴へるもの多きを加へた血氣に逸る項王、益々苛立つて、屢々城門を開いて戦つたが、心ばかり逸つて敵の包圍は容易にさげぬ。萬事は將に茲に休せんとした。百戦百勝の精兵は連敗の漢軍に長圍せられて、空しく餓を待つ止むなくなつた。

項王一夜、悲憤の餘り酒を呷つて鬱積した慷慨の氣を洩らさうとした。血に鳴る腕を撫でつゝ、猛將勇卒は鯨の如く盃をあげた。

夜は沈々さ更け渡るにつれて、殺氣立つた宴席も嵐の後のやうに静まつて行き、青白き燭の光は、死屍の如くに酔ひ潰れたる將士の上に、はたまた蒼白く興奮した項王の血走る瞳の上に、靜かに輝いた。

フト、項王は耳を澄ました。城外に遠波の如く聞ゆる騒々しい歌聲が湧き起

つたからである。耳を澄ませば、それは正しく漢軍の陣營のほそりである。城を包圍した漢軍の陣營の四方より八方より湧き起る歌聲に違ひはない。

項王も、その傍に侍した寵愛の虞美人も、酔ひ潰れたる將士も、等しく耳を澄ましてその歌を聞いた。燭はまたさきもせず青く輝く。

聞け！ その歌を！ 項王の手にあつた大盃は盤上に擲たれて微塵に散つた將士の顔にも、無念の炎が爛々として燃えた。

歌は項王が寸時も忘れ能はぬ故郷、楚國の歌であつた。今や、城外の四面には、暴虐の王を呪ふが爲に、楚人は大群をなして押し寄せつゝ、彼等の歌を高らかに歌ひつゝあるのである。天下の民望を失つた項王は、包圍城中、痛飲の夜深うして、遂に、已れが寸時も忘れぬ故郷の楚人にまで呪はれつゝある事を知つたのである。漢軍百萬の包圍は何かあらむ。鐵蹄一度向はゞそれを破るに何の手間隙いらうぞ。されども、今宵聞く四面楚歌の聲は、破らんとして破り難き大敵ではないか、項王は遂に故郷にまでも見放されたか。勇武天下に比



なしと雖も、はたたさへば龍に翼ありとも、天下悉く我を呪ふの時、我武は振ふに由なく、我身おくに處なし。夜深うして四面楚歌の聲、連勝の英雄當時の感慨果して如何であつたであらう。

宴席は再び殺氣立つた。項王は更に大盃を重ねて痛飲し、悲憤慷慨のあまり歌つて曰く、

「力、山を抜き、氣、世を蓋ふ。

時に利あらずして驩逝かず、

驩逝かず。驩の逝かざるを奈何せん」。

虞や虞や若を奈何せん」。

英雄の末路、何ぞその言の悲痛なるよ。灯の影に項王はくりかへしてこれなうたつた。遂には虞美人も、涙と共にこれに和した、左右の將士、熱涙潸然として下り、仰ぎ見るものさへない。あゝ、百戦の猛將、時に利あらずして驩に跨つて雄姿を陣頭に進むる能はず、愛する美人虞は、今は落武者のかへつて

足手まさひさなるのみである。虞や若を奈何せん。英雄の心緒みだれて絲の如し。

宴終るや、項王は、酔に乗じて、殘兵八百餘騎を一手に提げ、疾風の如く城外に現はれ、十重二十重に圍める漢軍の一方を、無二無三に突破して、長驅して南の方淮水を渡つた。

### 五 烏江畔最後の血戦

酔後の餘威も、悲憤に熱した意氣さを提げて圍を衝き、淮水を押し渡つた項羽の軍は、餘り盲目滅法に長驅した爲、道を失つて途方にくれた。その時項羽に従つたもの僅に二十八騎。堂々鴻門に陣した時の四十萬騎に比して何ぞ衰殘の面影の哀れなる。

項王遁れたりさ見るや、漢王は騎將灌嬰に命じ、數千騎を率ゐてこれを追はしめた。灌嬰の一隊は、淮水を渡つて、道に迷へる項羽に追ひ繼つた。



項羽は止むなく近傍の四潰山に陣し、左右の人々をかへり見て、長歎して曰く、

「われ兵を起してすでに八年、その間七十餘戦を経たが、未だ曾つて敗れた事はない。然るに今日、ここに進退谷まつたのは、これ決して戦ひの罪にあらず。天我暴虐を怒つて我を滅さうとするのであらう。死はもとより惜しむ處ではない、願はくば諸君のため、斬つてく斬り死せん」。

言悲痛を極めて眉は上つた。諸士の劍は風なきに血ふるひして鏘々さ鳴る。二十八騎を四隊にわけ、四潰山の陣より、灌嬰數千の漢軍中に躍り入り、喚き叫んで縦横無盡に斬りなびけ、一將及數百人を倒したが、敵は無敵の大軍である、漸く一方の圍を潰えさせ、項王はじめ決死の一隊、馬に拍車をあてて又もや東に向つた。項王はこの窮境中にも、江東の已れの生地を忘れず、只管その方角にのみ馬を急がせた。すでにして烏江の岸についた。川を渡れば即ち江東である。故郷である。烏

江の水は舊の如く溶々さ、大空の雲を浮べて流れて居るが、八年前、滿身の覇氣を包んで西に向つた項羽は、今尾羽打ち枯らした敗軍の將となつてこの岸に佇んだのである。

岸に一人の亭長があつた。彼は項王の顔を見知つて居て、悲惨なるその境遇を聞いた後、

「然らばこれよりこの川を渡つて江東に入り給へ。江東は天下に比してこそ小なれ、なほ沃野饒々として千里のひろさがある。以て王となるに足る。大王よ。疾く川を渡り給へ」。

と、親切にも自ら船を櫂してしきりにすすめた。夢寐に忘れぬ故郷ながら、又、今の今まで、如何なる窮境にも、たゞ故郷へさばかり急いだものを、さて川一筋をへだてた東にその地を眺めては、又。ためらふべき或心地が油然と胸に湧く。あゝ、天地間、はや身を入るゝ尺寸の地なきか。



彼は次の如く歌つた。

「江を渡つて西す、江東の子弟八千人、

今一人の生還するものあるなし。

たさひ父老我を憐んで王さすとも

我何の顔ばせあつて父老に見えんや」。

進むに東烏江をへだてて、父老に面目なき江東あり。退くに背後に迫る無数の漢軍あり。往時青雲の志と共に、江東の子弟八千人をひきゐ、長鞭一揮、西に渡つた烏江々畔は、めぐりめぐつて、今は項王最後の舞臺となつた。

項王は、愛馬騶を亂軍中に失はむ事を恐れて、これを亭長にあたへ、群り襲ふて漢軍中に突撃して、又の續く限り奮闘力戦したが、遂に身十數創を蒙つたがため、小高き地に登つて、自ら首を刎ねて敵に示し、變轉極りなきその生涯を終へた。漢王劉邦は厚くこれを葬つて、喪を發して追悼した。恨みは長し烏江々畔、溶々として逝く水の、聲なきに彈ざる無限の哀韻は、

この數奇を極めたる英雄の幻の如き生涯を語つてなほあまりがあるではなからうか。再び記せよ、夜深うして四面楚歌の聲。恨みは長し烏江々畔。



# 四 赤壁の戦

(孔明奇計を以て姦雄を破る)

## 一 劉備三度孔明を訪ふ

「君が三度の訪れを

そむき果てめや知己の恩

羽扇綸巾風かるき

すがたはかへで立ち出づる

草廬あしたの主やたれ」。(土井晩翠「星落秋風五丈原」)

たゞ自分の武威を張る事にのみつとめて、人を用ふるの明なき當時の英雄の中に、その勢はさほど大ではなかつたが、早くも諸葛孔明の非凡なる才略を見抜いた孫郡の劉備は、自身がすでに一方の將たる身であるのをかへり見ず言をひくうし、禮を厚うして、隆中山に、世を捨てて、雪花風月を友としつ

ゝあつた孔明を、三度までも訪れて、その湧くが如き才略をからむとした。一旦俗世を厭ふてかくれた身ではあるが、あまりの懇請に断りかね、且ば又、その知己の恩義に絆されもして、孔明は遂に隆中の草廬を出た、神の如き英才は、麻の如く亂れた戦國の唯中に、その神謀を運らさむとするのである。風かるき臥龍の装ひのまゝ、朝夕なれし假の庵をすてた孔明の、その胸中の感慨は如何であるだらう。

當時天下の形勢如何にさ見るに、後漢の帝室全く滅びて、魏に曹操あり、呉に孫權あり、孫權の勢ひは到底曹操に及ばなかつたが、それでも、まだ屈服するまでには至らず、諸方の戦ひに破れながらも、辛うじて餘命を保つて居た劉備はさいへば、百斤の鐵棒を自由自在に振りまはすさいふ關羽、張飛の猛將をひきゐては居たが、これにて曹操には齒もたたず、至るところに敗れて、最早策の出づるところなく、遂に孔明に頼つたのである。即ち中原の地は曹操の占領するところとなり、その勢威並び立つものなく、天下は殆んど一手に握つ



て居るかの観があつた。  
 もよより孔明がこの情態を知らぬ筈がない。彼は直に劉備に策を建てていふには、

「曹操は今や日の出の勢で、百萬の大軍をもつて、天下に號令して居るのであるから、突然争つても到底勝利を得る事が覺束ない。だから、武を用ふる事を喜ぶ荊州と、要害の堅固な益州とを占領し、敵に備へると共に内部をよく治め、孫權と和睦を結んで、形勢を見て居たならば、必ず天下に覇を唱へる時期が来るであらう」。

劉備は、躍り上らむ許りに喜んで、早速その策をさる事とし、孔明をば益々重用した。二人の交りが次第に親密になつて、劉備が二も孔明の説にのみ従ふ有様を見た舊來の將、關羽、張飛は、心中ひそかに快からず、猜み忌ふやうすがあつた。早くもそれと察した劉備は、ある時それ等の人々に向つて、「我に孔明あるは、猶魚に水あるがやうなものである。我が天下に覇を唱へん

とするにあつて、孔明の如き英才を得た事は、この上もない幸ひといはねばならぬ」。

さいつて、諸將の猜疑をなだめたので、諸將も、深く劉備の意中を察し、孔明に信頼して、再び猜むやうな事はなかつた。

英雄、英雄を知る。君臣水魚の交りは、やがて次第にその光芒を現はし、劉備をして三國鼎立の基礎をかためさせた。

隆中の別天地、空の彼方におほひはびこる黒雲を、浮世の塵と眺めた身の、今や自ら渦中に投じて、神謀鬼算に敵をかけ惱まざる。世は一局の棋なりけり。胸にあふるゝ經綸をひそませて、孤琴を友とし、西窓の残月に、限りなき慰藉を得た頃のなつかしさよ。ゆくりなく立ちも出でけむ舊草廬、三顧知遇の恩に感じて、永き睡りよりさめたる諸葛亮孔明の前途こそ、眞にはかり知られぬ光明の巷ではないか。



二 長板橋上の阿修羅王

劉備と共に荊州に居た劉琮といふもの、曹操の大軍に襲はるゝのが恐しさに旗を巻いて曹操に降参し、荊州を曹操にさし出して了つた。劉備は大に驚いたが仕方がない、孔明ならびに諸將をひきゐて夏口に走つた。荊州は最早劉備のものではなかつたが、その人民は何れも劉備の徳になつき慕つて居たので、曹操の下につく事を好まず、夏口に赴く劉備の後を追ふて、その味方についたものが、十餘萬の多きに上つた。

劉備はこの熱誠溢るゝが如き士民をひきゐて、湖北省當陽まで走つた。

曹操は荊州に入るに共に、劉備が夏口に向つて去り、多くの士民がこれに従つたといふ噂を聞き、烈火の如く憤るゝと共に、精銳の騎兵三萬をすゞつて、長鞭一揮、夜を日についで劉備の後を追ふ事二日、七十里許りの道程を馬蹄にかけて、當陽についた。

素破敵軍来る！と、劉備方は長坂橋といふ橋をさしはさんで迎へ撃つた。暫らくは兩軍息をもつかず攻め戦ひ、河水滔々として漲るほざり、人馬のおたげびさ、矢のうなりさは物凄くつゞいたが、何をいふにも劉備方は、訓練された軍兵でなく、普通人民の集合した、所謂烏合の衆であるのにひきかへ、曹操方は、すゞりにすゞつた精兵である。またたくひまに駆けなやまされて、劉備方は散々の敗北となり、劉備は孔明等と共に先逃げのび、猛將張飛、僅かに二十餘騎を従へて、殿軍となつて、味方の安全をはかつた。

打ち見やる對岸には、曹操三萬の精兵が、戦勝の餘威物すどく、逃げ行く劉備の後を追はんとして雪崩の如く長坂橋を押し渡らんとして居る。

張飛はこの有様を眺め、味方をはげまして橋をこぼち、河をさしはさんで曹操の大軍に向ひ、馬を陣頭に乗り進めて、一丈六尺の矛を水車の如くふりめぐらし、漆の如き長髪と、虎の如き鬚髯を風に吹きみだしつゝ、馬上に立ち上つて、はるかに曹操の勢を屹こにらんだ。



その武者ぶりの美事と恐しさ。流石勝ち誇つた曹操勢も、思はず一步たじろぐ時、

「我は是張飛なり。汝等來つて死を争へ」

と呼ぶ張飛の大喝が、あだかも雷の如く河面を壓してひびき渡つた。

曹操勢、はじめの勢も消え失せ、顔見合せて後退りする許りである。僅か

一人の張飛は、かくの如く、長板橋上、三萬の敵軍を叱り退けた。豪傑の意氣

眼前に見る如く、三斗の溜飲一時に下るの感があるではないか。

張飛の大喝よく三萬の軍を防ぎさめた間に、劉備も孔明も無事に夏口の陣に

落ちのびた。

### 三 呉に説く英雄三寸の舌

よしや孔明に古今を空しうする奇才ありとも、敗餘の劉備には策の施し方もない。回天の雄略、いたづらに時機の至るを待つの外はなかつた。

時に曹操は、長板橋に劉備を破り、勢ひに乗じて湖陵を占領し、一方劉備の

陣せる夏口をうかがふと共に、直に楊子江を下つて江東の地に入り、一舉に吳

の孫權をも蹴破らむと志し、先、書を孫權に送つて曰く、

「予に八十萬の水軍あり。今將に、楊子江を下つて、將軍と吳に雌雄を決せん

とする準備中である。

このおどし文句の利目は忽ちあらはれて、孫權はじめ吳の群臣等は、恐れ惑

ふて策の出づる所を知らなかつた。曹操の武威の大なる、戦はずして早や吳の

上下をふるひ上らせたのである。

吳國がかくの如く上を下へさ惑ひ騒ぐ時、はるか夏口の陣中に、ひそかに會

心の微笑を洩らしたのは、天下の英才諸葛孔明であつた。

あゝ、寡勢を以て僅かに餘命を保つ劉備の軍中に在つて、しかも、今、吳の

上下が恐れまどふ最中にあたり、曹操八十萬の大軍をひかへて、孔明は果して

如何なる策略を案じ出したのか。



一日。孔明はひそかに夏口の陣を出で、一葉の船を、溶々涯なき楊子江上に泛べた。木の葉の如く河心に浮んだ扁舟の上には、一代の英才たる彼自身が乗り移つて居る。無心の舟は、無心の流に従つて、權のあがきもゆるやかに、次第々々に江を下つた。

逝く水の流！ 扁舟上、苦を下して、智慮深き眼を河面に移した時、英雄の胸中、萬感去來する事交々、隆中の草廬にあつた時、附近の湖水に棹し、猿の聲を聞いた思ひ出もあつた。その身、今や、天下を動かす神謀を抱いて流に従つて江を下る。逝く水の流さ人の世さ、——はかり知らぬものは運命の導きである。

江を下つて孔明は江東吳の地に入つた。そして、上下をあげて困惑の渦中にある孫權の陣中を、飄然として訪れた。説くところは、曹操の大軍決して恐るゝに足らぬこと、今や吳は劉備と争ふの時でないから、共に力を協せて曹操にあたるのが得策であること等であつた。

吳の上下は、救ひの神のやうに、喜んで孔明をもてなした。三寸の舌の威力は、多年の恨を一掃して、兩軍の合同を決定せしめたのである。

孔明は何故曹操の軍恐るゝに足らずとしたか。即ちここに英雄の明けき才略の閃きがある。曹操は、すでに本據地魏を去る事程遠く、糧食に不足を感ぜつゝあるのみか、軍兵八十萬さは稱するものの、その實三十萬を越えず、しかもその多くが、純粋の魏の軍兵ではなく、新しく攻めこつた地の兵士であるが故に、その統一が十分でない。故を以て、たさひ少數なりとはいへ、劉備孫權の軍兵が、決死の勇を以てふるひ戦へば、勝利を博する事は疑ひもない。加るに、曹操の軍は水軍さは稱するものの水に馴れぬ。それに反して、味方は南方、楊子江の流に親しんだものなるが故に水を恐るゝ如き軍兵ではない。進んで、江上に敵を迎へ討てば、勝を得る事は愈々たしかである。孔明の策はここに立脚したのであつた。

策成るゝ共に、合同も成つた。孫權はその將周瑜に精兵三萬をあたへ、劉備



は自ら手兵を提げて夏口を發し、楊子江上、赤壁山の麓に、勝ち誇れる魏の大軍を迎へ討つ事となつた。

劉備孫權遂に滅ぶか。或は勝つて三國鼎立の勢を示すか。天下分目の一戦は溶々たる長江の一區域、赤壁のほとりに開かれるのである。

#### 四 江上火攻の計略

南支那、一望の大平原は、吹きすさぶ寒風の下に凍つて、折々は雪をさへ伴ふ冬の期節であつた。河岸の楊柳も葉をふるつて、細い枯枝が糸の如く風に戦いて居る。海の如くひろい長江は、雪解の水に岸をひたし、濁流漫々としてはるかの地平線につゞく。岸に立つて靜かに見入ると、氣も遠くなる程物凄じい濁波が渦巻いて居る。

水に馴れぬ魏軍は、果して恐れた。櫓をそろへた數多の戦艦もあまりの水勢に魂を奪はれて、赤壁山の麓の岸に陣取つたまま、河中に突進する勇氣も

なかつたが、かくては果てじこ、數百隻の戦艦、悉く船をつなぎ合せて、互に便り便られ、動搖を防ぎながら、多數を恃んで襲ひかゝつて來た。

劉備の軍は陸上に、吳の周瑜の精兵は艦上にあつて、この敵艦の來襲を待つた。周瑜は敵狀如何を眺めやれば、孔明の説いた通り、果して、敵が水を恐れつゝある事は明かに讀まれた。如何に衆を恃むさはいへ、味方は、水中の戦に長じた江東の吳軍である。一舉にして破るは決して至難の事ではない。進め！と許り、漫々たる濁浪をついて、逆に敵軍目がけて進撃した。

水勢矢の如き江上は、忽ち敵味方入りみだれこの大接戦となつた。吳軍の活動は縦横自在、散々に敵を混亂せしめ、目にあまる大艦隊を散々に討ち破つた。

夕陽が冷めたく、斷崖そゝり立つ赤壁山に照らす頃、第一戦に不覺をこつた魏軍は、一先、艦列をたてなほすべく岸に集つた。破れたさはいへ大艦隊である。艦數よりいふも、戦鬪力よりいふも、まだ吳軍よりはるかに優勢であ



る。勝つたさはいへ呉軍も、決して損害がなかつたのではない。長江の流凌じき叫聲を上げて奔騰する夕、兩軍は隊伍をさへて第二戦準備にさりかつた。

明けて赤壁の第二日。斷崖の赫面を洗ふ河波は昨日に増して更に凄じく、さながら、奔馬の狂ふが如く、轟々耳を聳する水音は、戦の悲惨を暗示するかのやうに鳴りひびいた。

前敗の耻辱を雪がん爲、且は又、前日の戦によつて幾分水に馴れた魏軍は新しく隊伍をさへて、將に出動しようとした。

時に呉の周瑜の部下に黄蓋といふ者があつた。周瑜に向つて、奇策を献じていふには、

「我軍は今風上にあるから、詐つて降参するさ見せかけ、敵の油断を見すまして、火攻の計を行つては如何であらう」。

周瑜は大に喜んで、直さま一通の書を認めて曹操の許に送つた。

「我軍は、昨日の戦に於てこそ多少好成績を得たが、今後永く大王の軍と對抗する勢は到底ない。戦つて後に滅ぶよりは、今、戦艦をひきゐて大王の軍門に降る方が得策だと思ふ。どうか我軍の降参を許していただきたい。許していたゞけるやうなれば、直に軍をひきゐて大王の許に参るであらう」。

この書面は周瑜の名によつて記された。神ならぬ身の曹操、さては呉軍、わが威風に怖氣立ち、全軍こそつて降参するさ覺えたり。幸ひ水戦に困り切つた折だから、早速許してやらうと、喜んで承知する旨を申し送つた。

得たり！と許り、黄蓋は、數十隻の船に枯草、枯芝等を満載し、その上に油を注いで、白い幕を以て蔽ひかくし、烈風を背後からうけて、根據地の北岸を出發し、魏の戦艦の集れる南岸に向ひ、江を横ぎつて静々に進んだ。

曹操は、愈々周瑜が約束通り、白布を掲げて降参するものと思ひつめ、戦ひの準備もせず、敵の近づくのを待ち構へて居るさ、彼我の間數町の近くになり、呉の船が魏軍の上流、しかも眞さにも烈風を背負ふやうになつた時、俄か



に黄蓋は各船に點火の令を下した。忽ち數十隻の船は炎々たる猛火を載せ、烈風に吹きあふられつゝ、流れにそふて眞一文字に、魏の戦艦の群り集ふ只中に突進して來た。

素破一大事！ 魏軍はあせり立つて、右に左に大混雑を來したがもうおそい！ 各船は互に聯結してあるから、急速の運動には至つて不便である。まどくする中、火船はこの亂れた艦隊の中に突入し、烈風のまゝに荒れまはつたから、火は忽ち全艦隊にうつつて、水上の一大火災、阿鼻叫喚の修羅の巷は、赤壁山下の江上に展開せられた。

燃えつくす船、沈む船、傾く船、焦げた木片、押し流され行く數多の軍兵、火はまだ燃えつくさぬ船から船へ、白煙を上げてもえひろがつた。

魏軍の大狼狽につけ入つて、周瑜の艦隊は江上より、劉備の軍は陸上より散々に攻めつけたので、流石豪氣の曹操も、一たまりもなく敗れ去つて、霸權は夢の如くその手を放れた。

水聲滔々、戦場の名残はあさ形もなく流れ去つて、勝利に微笑む兩將の顔に、光榮ある日は鮮かに輝つた。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

英雄の經綸は時代を創造す。孔明の吳に説いたのは茲に事實となつて、孫權は吳に、劉備は蜀に、はた亦敗れたる曹操は魏に、所謂三國鼎立の基はここに築かれたのである。

赤壁山下、長江上の戦の筆を洗ふにあたり、吾人は、まだ孔明の英才について、説くべき事の多きを思ふ。——蜀國の建設、劉禪の擁護、出師の表、五丈原頭の永逝、——しかも事、赤壁戦に關係なきを以て、他日改めて稿を成す事とし、左に「五丈原」の一章をぬいて古人をしのび、併せてこの稿の結取とする。

「二葉軽く棹さして



三寸の舌突にさけば

見よ、大江の風狂ひ

炎みだれて英雄の

雄圖くだけぬ波あらく。

### 五壇の浦の戦

(二位尼幼帝を奉じて海底に沈む)

#### 一 よるべなき舟路の旅

藍を溶かしたやうな明るい色の海に、白い浪頭を爽やかに走らせながら、煙を吐いて行つた小蒸汽船が、向ふの水彩畫のやうな青い島影にかくれた頃、今通つた跡に、しばらくは小さい浪のぞよめきが、細く長くレールのやうに、  
いて居るが、やがてそれも油のやうに静まつて行く。

海岸の旅館の窓から眺められる満珠干珠の兩島には、じやれるやうに戯れかかる波の、やさしいしぶきがたえず迸つて、そのずつと向ふに、夢のやうな九州の島影が、大きな背景を作つて仄見えて居る。

砂についた海岸の青松原の渚にも、やさしい秋草の咲いて線路の堤が延び、その上を、東に向ふ汽車と、西に着く汽車とが、百足のやうに松の木の間



をチラ／＼と走つて行く。白い煙が、暫時は、青い松葉にもつれて消える。  
車窓より眺める内海の繪のやうな明るい波、波を彩る帆船や島や日光、――  
本土の西端、壇の浦の風色は、ありし昔の悲劇を知らず顔に美しく且長閑であ  
る。

× × × × ×

安徳朝、壽永四年の春三月、うす紅に咲く櫻の花の、チラ／＼と、さそ  
ふ風なきにみだれ散る頃、一代の榮華にほこつた平家の一門は、その美しい優  
しい姿に、底知れぬ滅亡の暗い影を宿しつゝ、一の谷、屋島、支度さ、數度の  
戦に脆くも敗れて、今は逃れるに道もない西の端、壇の浦の海邊へ落ち延  
びたのであつた。高樓の花の宴に、銀造りの太刀を佩いて、眉墨細い公達が、  
さんざめきつゝ、盃を舉げた京の都を、驚のやうな木曾義仲に追ひ立てられ、  
つゞいて第二の都福原も、九郎判官義経が、一の谷の逆落しに、美事討ち

破られて、あはてまどひつゝも海に浮び、よるべも知らぬ波の間に、讀枝  
の屋島に落ちのびて、吻に一息洩らす間もなく、逆櫓の争に梶原を説き伏せた  
義経は風雨を冒して、又も屋島を襲ふたので、ここにも永く居たたまらず、志  
度の浦に退いたが、逃げおくれた味方の勢二百騎許りが、あせりにあせつて後  
れ走せに落ち来るを、無念や敵を見誤つて、再び波にゆられつゝ、落ちつく島  
も荒磯の、よるべなき舟路の旅に迷ふべく餘儀なくなつた。

木曾が粟津の流れ矢にあつた最後、一の谷の逆落し、生田の門の梶原景季  
が熊の梅、敦盛の最後、屋島における景清美保谷が鏝引、那須與一が扇の的、  
義経の弓流し、――數へ立てれば壯快なる悲壯なる物語の種は多い。けれど  
も今はそれ等を詳しく説く折ではない。直に花の散るが如く、又夕陽の西に  
沈むが如き、悲壯にも亦美しき平家の末路、――壇の浦の戦の序幕に移らう。



二 兩軍の陣容

九郎判官義経は、屋島、支度に平家を打ち破り、逃ぐるを追ふて、本州の西端、周防の國に入り、兄範頼と軍を合せ、息をもつがせす長門の國壇の浦に敵を追ひつめた。

この時、紀州の國の任人に、熊野の別當湛増といふものがあつた。平家に重恩をになふ身なるに拘はらず、形勢平家に非なるを見て、心變りして、源氏に味方せんとは思ふたが、流石に心に疚しかつた見え、新熊野神社に七日間參籠して、神託を乞ふたところ、「只白旗につけ」この御託宣があつたがまだそれでも安心が出来ず、更に、白い鷄七羽、赤い鷄七羽を神前で戦はせて、その成行を卜つたところ、赤い鷄は一羽も勝たず逃げ失せたので、遂に意を決して源氏方につく事とし、一門の兵二千餘人を、二百餘隻の兵船に乗せ、壇の浦さして押し寄せた。平家方、これを見て、さてこそ湛増我に味方するぞ

と、喜び勇んで見る中に、船は皆源氏方についたので、たゞさへ心安からぬ平家方は、益々心細さを感じたのであつた。

一門の浮沈をこの一戦に控へ、死物狂の奮闘の、最後の舞臺と定めた壇の浦の繪のやうな海上には、戦のはじまる前、すでに悲風が漲つて居た。雨が風か、優にやさしい公達の胸は、波のやうにゆれつふるへつ、たゞ我に神の助あれと祈るばかりであつた。

當時敵味方の勢力はさへば、源氏は兵船三千餘艘、平家は僅に千餘艘、數に於てすでに平家は三分の一にも足らぬ。加ふるに源氏には連戦連勝の餘威がある。乗組む將卒は一騎當千の、所謂坂東武者である。何れから見ても平家には勝目が少しもない。唯、窮鼠はたましく猫をかむ例がある。戦敗のドン底に陥り、のるか反るか、浮ぶか沈むか、滅ぶか勝つかの瀬戸際に迫り、これ以上で退くべき寸地の餘裕もない味方の、死物狂の働きは、或は思はぬ効果を現はすやもはかり難い。平家方の恃みはたゞこれだけである。更に之を後世の



研究者より見れば、窮鼠となつた平家の死物狂の働きは、たゞひ源氏方にうち勝つ事は出来ないまでも、ありし昔の面影をさめめた物なれば、必ずやムザく敗北の汚名もうけまい。そこに花々しい最後の、却つて勝つた源氏よりも深く美しい物語があるに相違ない。と思はれる。

果して、屋島、志度に、殆んど何の語るころもなく、臆病風に吹きまくられた平家は、その最後の戦には、勝つた源氏よりも、更に多くの悲壯なる物語の數々を残した。

戦いよくはじまらむとする日、源氏方では思はぬ争が起つた。梶原景時が義經に向ひ、その日の先鋒を願つたところ、利かぬ氣の義經は、自ら先鋒の働きを試みんとする下心があつたところから、又もや散々に梶原を叱りつけた。梶原怒つて太刀に手をかける、義經も同じく柄に手をかける。あはや大事に及ばうとする時、左右のものが、漸く二人をなだめて、引き分けたが。これによつて見ると、義經は勇敢なる武將ではあるが、未だ衆人の上に立つ器量は

なく、世人の所謂、梶原の讒言のみが悪いとは断定出来ぬではないか。

それはさておき、この時、兩軍の兵船は、海面をへだてる事僅か三十餘町の間につき、その上、折から潮は西に向つて瀨のやうに走つて居たので、平家方は、心ならずも西へ西へ押し流され、源氏方は、次第にその後を追ふやうな形になつた。

中にも梶原は、殊更に瀨の早い汀に近づいて敵の船に一早くも漕ぎよせ、熊手を以て敵船を引き寄せ、太刀抜きつれて躍り入り、散々に斬りまくつて、先頭第一の手柄をあらはした。

これを戦の序開きとして、愈々平家最後の戦は開かれた。

### 三 遠矢のたゝかひ

戦の機は熟して、兩軍一時にドツと開の聲を上げた。その凄じい叫びは、海面を壓して轟き渡り、龍神の眠もさめんかと思はるゝ許りである。



關の聲も沈まつた頃、平家方隨一の勇將新中納言平知盛は、決死の形相すさまじく、船の真中に突立上り、味方の兵船に向ひ、大音聲を張り上げて「支那天竺はいふも更なり、わが日本においても、たさひ天下無雙の名將勇士さいへども、運命つくる時は力及ばず。されど記せよ。人は死すとも名は惜しむべし。東國の者共に卑怯の振舞見せな。今に及んで何のためにか命を惜しまむ。たゞ名譽ある戦せんのみ。

言々悲痛を極め、將士慘として聲を呑む。上總の國の任人、惡七兵衛景清進み出で、

「某かねてより存じ居り候。源氏方の坂東武士は馬上にてこそ働きも致せ、水には決して馴れ申さず、たさへば魚の木に登りたるが如きものに候、彼等の不馴れに乗じて、一々海に漬け申さむ。」

勢鋭く言ひ放つた。これにつゞいて越中の次郎兵衛、

「同じく目指すものなれば、大將義經をねらひ給へ。義經は丈低く、色白く、

殊にむか齒少しくさし出でたり。されど、常に鑑直垂をさりかふる故、直に見分くる事難し。」

「義經如き小冠者、心こそ猛くさも何程の事かあらむ。つまみ上げて海に投げ入れむ。」

流石最後の合戦の事さて、殺氣は先平家方にみち溢れた。知盛はこの有様に幾分たのもしさを感じつゝ、總大將宗盛をも、しきりにはげまして、味方の士氣を引き立てた。

千餘艘の平家方の兵船は、先これを三手に分けた。先鋒には山鹿の兵藤次秀遠さて、九州一の猛將、五百餘艘をひきゐてうち向ひ、つゞいて松浦黨、三百餘艘にて第二陣につゞく。最後の二百餘艘には、平家方の公達のがりくんだ秀遠の五百餘艘は、一艘毎に一人宛の射手を並べて、五百人、一時に矢並を揃へて源氏方に射かけた。源氏も直に應戦し、三千餘艘の兵船より、雨の如く



に遠矢を注いだ。みだるゝ村雨の野の篠の如く、天日を蔽ふて矢は八方に飛んだ、兩軍の將士は、雨霰の如く亂れ降る矢を浴びつゝ、茲を先途させめ戦ふた。鐵、甲はキラ／＼と日に輝き、波は風なきに怒り、鬨の聲は潮の如くに湧いた。勝敗未だ何れとも定まらず、赤旗白旗入りみだれて、矢の雨は一層繁くなつた。

大將義經、苛立つて先頭となり、船を縦横に漕ぎまはらせたが、平家方の猛射を受けて、鐵も楯も何の用をなさず、止むを得ず引き退く。かくと見た平家方、すはや味方の勝利なるぞ、この機をはずさず討てや進めやと、鼓をうち鳴らし、鬨の聲を上げて、勢たけく突き進んだ。

心にくき敵のふるまひかなと、船をのりすて、馬上にてたゞ一騎、波間に手綱かいぐり／＼、平家勢の眞中を、さしつめ引きつめ散々に射る武者がある。これぞ名だゝる武將和田小太郎義盛、義盛は、己れが射た矢の中、殊に遠くにさゝいた一筋の矢を、此方へ返せさせさしませぬいた、知盛その矢を抜かせて見る

さ、鶴の羽の長い矢に、うるしにて和田小太郎義盛と書き記してある。平家方の弓の名八、伊勢の國の任人、新井紀四郎親清、その矢を取つて和田に射返すさ、義盛にはあたらず、その後に進んだ三浦の介左近の太郎が左の腕をしたゝかに射た。義盛怒つて船にさび乗り、平家方の眞中に進み出で、散々に射出す矢一筋も過たず、二十餘人をその場に射倒した。

しばらくして、今度は義經の船に向ひ、はるか沖合より、ひよう／＼許りに一筋の矢がさび來つた。射手は船上に立つて、その矢返せと手招いて居る。抜き取つて見れば、山鳥の羽つけた大矢に、伊勢の國の任人、新井紀四郎親清さうるしで記してある。返し矢するものはなきか。さ、義經の言葉の下より、淺利の與一さいふもの進み出で、その矢を一目見て、長さも足らず、籠も弱し、それがしが矢にて返し申さんさて、弓を満月の如く引きしほり、四町餘をへだてたる敵船の、紀四郎親清目がけてひやう／＼放つ。ねらひたがはず紀四郎が胸板發矢と射抜いたので、親清たまらず船底へどつと落ちた。



かゝる間に兩軍の戦愈々猛烈となつた。互に面もふらず、命を惜しまず、こ  
 こを先途させめ戦ふ。海面爲に殺氣満々、波は怒つて、兵船の舷をうつた。  
 折しもあれ、晴れ渡つた紺青の春の空に、白雲にまがふ一旒の主もなき白旗  
 が、ヒラヒラと立ち迷ふよき見る間に、サツと下つて源氏の船の艦に吹きなび  
 いた。これぞ、八幡菩薩の加護と、義経をはじめ皆々これを拜して瑞兆を喜ん  
 だ。

四 「波の下にも都ありとは」

源氏がこの瑞兆に打ち喜んだ時、平家方には、運命を呪ふ忌はしい前兆があ  
 った。沖の方より、數千のいるかが、頭を揃へて押しよせた。晴信といふもの  
 これを卜つていふには、もし、このいるかが平家方の兵船に近づいて、そのま  
 ゝ頭を返したならば源氏が滅ぶであらう。もし又、進路をかへず、兵船の下を  
 くゞつたならば味方危しと。さているかのやうす如何と見れば、數千匹、頭を

そろへて船底をくゞりぬけて西へ向つた。平家の運命も早やこれ迄と見えたの  
 である。

衰兆はたゞこれ許りではなかつた。三年の永き年月、平家に従つて忠義をば  
 げんだ阿波民部重能は、その子教能を源氏に生どられたので、忽ちに心がはり  
 して源氏についた。これによつて平家方の、大將の乗れる船と、公達の乗れる  
 船とが、源氏方によく區別せられる事になつた。

必死の戦もそれより次第に平家方の受目となつた。源氏は重能の内通により  
 大將軍の船に全力を集めて攻撃をはじめた。さらぬだに多からぬ平家方の兵船  
 は、苦戦につぐに苦戦を以てするやうになつた。かうなるに頼み難きは人心で  
 ある。平家代々の臣でない四國九州の軍兵は、皆それごとく平家にそむいて源氏  
 に力を合せた。今まで従ひ來つた兵船が、軸をめぐらして君に弓をひき、主に  
 太刀をぬく。あさましき人心さはいへ、落日の如き運命にある悲しさ。悲憤の  
 涙は恨多き平家の人々の瞳をうるほした事であらう。げに移り行くは人の世



の有様である。恨むことも歎くことも及び難きは人の世の轉變である。たのみがたきは人心である。

あはれなる平家はここに全く末路に近づいた。機乗ずべしと見た源氏は、數千艘の兵船、軸を揃へて、追ひ迫らんとする。殘軍はもはや引き返して戦ふの勇氣なく、岸に近づいて陸にのがれんとすれば、波高うして舟をよせる能はず。汀によせんとすれば、待ち設けたる源氏の陸兵、どつと関の聲をあげて攻め討たんとする。海に數倍の強敵あり、陸にのがるゝにも亦敵あり。處は國土の西端壇の浦、平家一門はここに空しく海上をさまよふ敗殘の影寒く、心ある將士は血の涙を流して決死を誓つた。

源氏方はもとよりそんな事に容捨はない。機に乗じて、平家方のうろたへまはる船に乗り移り、あたるを幸ひに射倒し斬り倒し、海面に血の波をたゞよはす許りに奮闘した。

新中納言知盛、今は早やこれまでなりと、小船に乗つて、幼帝安徳天皇

の御座まします船に漕ぎよせ、

「今やはや、世の有様もかくの如くさ相成候、見苦しきやうすなきやう、船の掃除なし給へ。」

と、手づから箒をこつて、汚れたる物を海中へ掃きすて、跡を拭ひ、軸より艫まで、清らかに掃除した。

君側に仕へる女官達、この有様を見て、心安らず、左右より知盛にこりすがり、

「中納言殿、戦のやうすは如何に候ぞ。」

言葉せはしく問ひつめるやうすを見て、知盛流石に熱涙の溢れるを禁じ得なかつたが。しいて、聲高くカラ／＼とさうち笑ひ、

「只今珍らしき吾妻男を御覽するならん。」

さいへば、女達も聲を惜しまず泣き崩れた。

清盛の妻二位局は、かねてより覺悟は定めた上なれば、鈍色の衣をかつぎ、



袴のすそを高くきり、神璽を脇に、寶劍を腰に、幼帝を抱き上げ奉り、  
 「我は女なりとも敵の手にはかゝるまじ。志ある人々は我につゞき給へよ」。  
 さ、しづく、舷に歩み寄つた。

見下せば千尋の海は艦轄として舷にうちよせ、深碧の色、身の毛もよだつす  
 さまじさ、加ふるに、前後より迫り来る敵船に、味方は散々にうち破れ、今は  
 はや、この御座船までも飛び来る矢がうなりを立てる。

幼帝時に御年八歳、御かたち殊の外御美はしく、漆のやうなる御黒髪・ゆ  
 らくとして御背中までも清らかに垂れさせ給ふ。

この時、幼帝二位尼に向はせ給ひ、

「汝はこれよりいづこへ我を伴はんとはするぞ」。

さ、鈴のやうなる御聲にて問はせ給ふた。

舷に立つ老女と幼帝と、――げに一幅の悲壯なる繪畫ではないか。二位尼は  
 この御言葉を承るに共に、はらくと熱き涙を流し、幼帝に向ひ参らせて、

「君はまだ知し召されずや。先の世の御徳によつて、今萬乗の御位には生れ  
 させ給へど、この世の悪縁にひかれ給ひ、御運すでにつきさせ候ぞ。先、東  
 に向ひて、伊勢大神宮に御暇申させ給ひ、その後西に向ひて御念佛候ふべし  
 この國は粟散邊土と申して、忌はしき處に候。あの波の下にこそ、極樂淨  
 土とて、めでたき都の候、それへ御供致し候ぞ」。

さまざまにいたはり慰め奉れば、青色の衣に、御可愛らしき鬢づら結はせ給  
 ひ、玉のやうなる御眼に、あふるるばかり御涙を浮べさせ給ひつゝ、紅葉のや  
 うなる御手を合せ、先東の方、伊勢太神宮、正八幡宮に御暇乞あり、後西に向  
 ひて御念佛あらせ給ふ御いたはしさ、時ならば十善帝位に上らせ給ふ君の、雲  
 深き殿中におはしまし、天が下しろしめし給ふ尊き御命、運命の波にこそは  
 来て、入りみだれたる戦場の、見るも危き船の上、舷に立つて御念佛唱へさせ  
 給ふことの畏さ。船中涙にくれぬ者さてはなかつた。  
 かくては果てとて、二位尼は、



「今ぞ知る御裳瀧川の流れには波の下にも都ありとほ。」  
平家滅亡史の最高調をのべた一首の歌を高らかにさなへ、幼帝を抱き参らせたるまゝ、身をおどらして千尋の海底深く沈み去つた。  
見よ！ 傾き行く平家の運命は、今や僅かに残れる數十の兵船にのみつながら居るではないか。しかも源氏の重圍は更にく加はらんとする。ここに海上唯一の悲劇は終つた。

### 五 能登守教経の奮闘

幼帝海に入らせ給ふと見るや、流石決死の平家方も、はりつめた心もゆるみ、波間に漂ふ兵船の一つくんに、冷めたい死の影が匍ひ寄つて来た。今は敵味方より射出す矢數も少くなつて、唯聞ゆるものは浪の音、松風の響、それに勝ち誇つた源氏のあける関の聲。  
悲憤の涙を呑んだ平家方の諸將は、最早生き存へて何の望みもない。いざ諸

共に潔く、吹く春風に散る大和櫻のそののやうに、花々しく散らばやさ、重い鎧の上に、更に重い船の錨を背負ひ、相ついで海底の藻屑を消えた、平中納言教盛、修理太夫經盛、三位中将資盛、左馬頭行盛等、何れも一方の士大將として、世に知られたる勇者も、無念や敵にも組まず、傾く運命と共に花を散つた。

ここに哀れなまゝめ、世の嗤ひを招いたのは内大臣宗盛であつた。宗盛は平家の總大將ではあつたが、生來の臆病者さて、味方の諸將が何れも潔く戦死するのを眼前に見、且は十重二十重に源氏方にさり卷かれながら、なほ荒波の唯中へ躍りこむ事は出来なかつた。舷に立つて、如何にも思ひ切り悪くうろたへて居るので、流石味方の平家の武士も見るに見兼ね、不意に後よりドツと許りに海中に突き入れた。不意を食つて宗盛は、アツと叫ぶ間もなく底知れぬ海中に落ちこんだが、もさより最初から死ぬつもりはない。従つて他の諸將のやうに、重みをつけて海底深く沈む用意が出来て居ないので、見苦しくも波



間を浮きつ洗みつ、それでもまだ助かりたさ一心に、同時にさびこんだ右衛門の督の方許りを眺めて、右衛門の督助からば我も助からむ、死なば我も共に死なむと、浅ましくもまだ命を惜しんで居た。身怯未練のふるまひ、正しく平家滅亡の美しき歴史に大なる汚點を残したものである。

しばらく水中に苦しんで居る中、つとそその側に漕ぎよせた一艘の小舟があつた。これぞ源氏の勇士、伊勢の三郎義盛である。逸早く熊手をさしのべて宗盛の背に引つかけ、もがき苦しむのを無理矢理に船上に引張上げた。總大将もある身が、やみくも、矢一筋の手合せもせず、見苦しき姿のまま、敵の捕虜となつたのである。

平家方の勢すでにかくの如く、最後は刻一刻と迫つて來た。ここに平家方第一の猛將、能登守教経は、今朝よりの戦に、鬼神の如く荒れ廻つて、敵々敵を憫ませたが、大厦の倒れむとするや、一木のよく支ふるところにあらず、大勢すでに定まつたので、今は早やこれまでなり、いでや最後の思ひ出に、源

氏方の總大将、九郎判官義経を討ち取つて、その後潔く討死せんぞ、弓おつとつて散々に射立てたので、勝ち誇つたる源氏方も、一時にさつと色めき渡つた。矢種がつかると教経は、丈にもあまる大薙刀をふりかざし、一面にたちならぶ源氏の兵船を、舷より舷にさび移つて、阿修羅王の荒れたる如く、血眼になつて義経をさがし求めた。その勢に恐れて誰一人防ぎ止める者さへない。

義経もなるべく顔を合さぬやうにさけては居たが、何時の間にか教経大將の船に乗りうつり、義経を見つけ出して、すはこそ當の敵とぞんなれと、大薙刀を水車の如くふりまはし、微塵になれと斬りかゝつた。その様鬼神もたじろぐ許り、流石の義経も、かなはじこや思ひけん、薙刀小脇にさしはさんで、二丈許りをへだてた味方の船へ、ひらりさばかり飛び移つた。勢猛く追ひすがつた教経も、この早業には及ばん術なく、そのまゝ、舷に突立上り、太刀薙刀は海に投げこみ、鎧の草摺も引きちぎり、甲も脱ぎ捨てて大童となり、大手を



ひろ 廣げて大音聲を張り上げ、

「源氏方に我と思はむ者あらば、近寄つて教經を生捕にせよ。鎌倉に下つて兵衛の佐(頼朝)に一言せんと思ふ事あり。寄れや寄れ」。

と叫び立てたが、誰一人寄りつくものもない。中に土佐の任人、安藝の太郎實光同じく弟次郎は、凡そ二三十人力の剛の者、その家來にも同様の大力のものが一人あつた。この三人、我等こそ、能登殿生捕つて手柄にせんこ、小舟に乗つて教經の船に近づき、左右より、刀の鋒尖を揃へて、どつと許りに打つてかゝつた。

教經これを見て、先、眞先に進んだ家來を、どつと海中に蹴込み、つゞいてかゝる安藝太郎を、左の小脇にかひ挟み、弟の次郎を右の小脇にさし挟み、いでや汝等死出の供せよと叫びさま、もんどり打つて海中に躍りこんだ。夕陽流るゝ西海の、繪にも見られぬやうな美しい海面には、かゝる幾多の美しく勇しい活劇の名残が漂ひ、立田の川のみぢ葉の如く、風に吹き散らされ

た赤旗赤印が、汀によする白波を薄紅にそめなした。主を失つた平家の兵船は、潮に引かれ、風に従ひ、いづこさもなくゆられ漂ひ行く。

夕靄が、渚の白砂と青松とをつゞみ、仄見える滿珠干珠の島々に、よる潮のしぶきもかすむ頃、そよめきそめた内海の海面を、勝ちに誇つた源氏の兵船が静々さ隊伍を整へて引き上げて行つた。

あゝ榮華はすべて春の夜の夢の如し。次に來る滅亡の悲劇は、果して誰の身の上であつたらう。壇の浦の夕陽は次第に沈んだ。



## 六 モスクバの大火

(ナポレオンのロシア遠征)

### 一 無人の都

フランス皇帝ナポレオンは、連勝の餘威をかつて、一八一二年五月、十五萬の軍をひきゐ、パリーを出發してロシア遠征の途についた。途中、ドイツのドレスデンに暫く滞在して、諸國の軍兵を召集し、總勢四十五萬となり、六月二十二日、ドイツの東國境を流る、ニーメン川を渡つてロシアの地に入り、東を指して、眞一文字に、その都モスクバを衝かんとした。露國は當時アレキサンドル一世が皇帝の位に在つた。皇帝は、ナポレオンの侵入を防がんと爲、大軍をモレンスク城に集めてその進軍を妨げたが、ナポレオンは何の苦もなくこれを打ち破つて、無人の野を行くが如く、九月七日にはモスクバ唯一の關門ボロヂノに迫つた。

ロシアにまつては、モスクバは實に國民的歴史的の意味ある大切な都である。そのモスクバを奪はれまいとすれば、最早ボロヂノを死守するより外はない。即ち十二萬一千の軍兵は、決死の覺悟を定めて、敵にわが都をふみ荒させまい爲に、ボロヂノ要塞を固守したのである。ナポレオンは、味方の軍兵十三萬をすくつて、一舉にこの要塞を抜かうと企てた。ここにはからずも、ロシア遠征中第一の激戦ははじまつた。ロシア方の死守も頑強だつたが、數十度の戦に磨き上げたナポレオン軍の鋒先は更に鋭かつた。惡戦苦闘十五時間の後、さしもの要塞も遂にフランス軍の手に占領せられた。ロシア軍唯一の特みはここに絶えて、フランス軍は潮の如くモスクバをさして進撃した。ボロヂノはすでに陥つたが、敗れたロシア方は少しもあはて騒ぐ風はなかつた。隊伍を整へて悠々退却しつゝ、沿道の地の民家、糧食等を一々焼きすて、何一つの敵の手に委ねぬやうにした。



ポロザノ陥落後七日、即ち九月十四日を以て、ナポレオンの大軍は大河の漲る如く敵國の都モスクバに進入した。味方の優勢に恐れをなしたのか、ロシア軍は自國の都を敵に委ねるのに、何等目ざましい抵抗をも試みなかつた。パリ―出發後四ヶ月、ナポレオンはかねてより頼りにその日の來るを待ち構へて居た通り、殆んど指を風するに足る程の抵抗もなく、ロシアの都モスクバを見る事を得たのである。

占領當日、ナポレオンは、モスクバ郊外の小高い丘、――雀が岡に登つて多年胸に描きつゝあつた都を眼下に見下した。

物静かな全都は、音もなく眼下に横たはつて居た。石造の高い建物や、宮殿や、天にそびゆる尖塔や、町を縫ふ白い川や、白い建物の間を青く染め出して居る小さい森や、――すべてが、清らかな舊い歴史につゝまれた色彩を現はした。

ナポレオンは、手を後に組んだまゝ、またゝきもしないで、この敵の聖都の

全景を眺めて居た。すでに我手に入つた敵國の都を見つめて居た。はるかに消え去らむとする地平線のあたりからは、白い雲が綿をくり出すやうに湧き上つて、それが次第に全都の空を蔽ふて行く。蔭が低く、高い尖塔のまはりに輪を廻がいて、やがて雲の中に消えて行く。大きな宮殿の窓硝子に反射する日光の輝きが、手に取るやうに鮮やかである。

到るところ、兵を動かすところ、そこには必ず勝利の榮譽が在つて、全ヨーロッパは、今や彼の指さすまゝに自由である。最後にこのモスクバ占領を企て、それさへ最早思ひのまゝに成功した。全勝の意氣は、胸中に滿ち溢れて、彼は雀が岡に立つたまゝ、わがこし方の榮ある歴史を、眼前に横はつたあはれる敵の帝都の色彩に、酔へるが如く見されて居た。

夕陽はやがて、その血のやうな光を數千の矢の如く、斜めにこの帝都に注ぎかけた、白い石造の高樓は、繪のやうに眞赤に彩られて、日光の移り行くがまゝに浮動するやうである。雀が岡のナポレオンは、高い影を地上にひいたま



、石像のやうに直立して、無言でこの偉大なる光景の裡に、沈黙の都をうちまもつた。

滅ぶるものは美しい。百戦百勝の常勝皇帝ナポレオンは、今、滅び行くものの美を感じたのである。あはれにも我前に姿をさらして、我思ふまゝになし得る都の、滅亡の刹那の静けさを、紅く彩る夕陽の色、ナポレオンは今その美に打たれたのである。

彼はくり返して思ふた。げに滅び行くものは美しい。我兵を起して、疾風の如くヨーロッパをふみにぢり、今このモスクバの郊外に立つては居るが、勝利の度数は幾度重つても、まだかくの如く心中より我を動かす美は発見せられなかつた。あゝ、滅亡の美！ 勝つて遠き遠征の途に、煩はしい統一を夢みるよりも、全力を擧げて、猶且及ばずして、この美しき滅亡に陥る方が、はるかに人の世の美をつくしたものではなからうか。又、我今常勝の冠をいたゞいて、世界をわが物顔に馳合し得ようとも、それが果して何時までつゞく事

あらうぞ。遂には、わが今眼下に見るモスクバの如く、眼に見えぬ運命の前に滅ぶる事は必定である。思へば勝利はたゞ一時の夢に過ぎぬのみならず、常に心をつきまゝ不安があるではないか。それにしても、不朽不變は滅亡の美しさである。

英雄の心緒は糸の如く亂れた。かくて彼は、自ら勝利を得た事を以て樂しまず、悄然として頭を垂れたまゝ、夕陽の中をさぼくさ岡を下つて、死せるが如きモスクバの市に入つた。

静かな筈である。市には人影は一人も見えなかつた。家々のドアは閉ぢられ室内は奇麗に掃除せられてあつたが、任む人さては一人もない。食卓の上には、皿やナイフが置かれてあつても、誰一人それに向つて居るものはなかつた。全市に人影なく、何物の聲もなく、空洞のやうに静まり返つて居た。

勢ひこんで市中に入つたフランス軍は、あまりの事に手持不沙汰のまゝ呆氣にさらされた。町の隅々までも見廻つたが何者も眼に入らぬ。廣大な都、モスク



パは實に無人の都であつた。

あまりの手應へなきに呆れた次には、抑へきれぬ不氣味さが全軍を襲つた。薄氣味悪く感じた。全軍は吸はれるやうに市中に入つたが、静かな事、氣味悪き事は益々甚しくなつた。大きな呼吸をすれば、それが、更に大きな反響なつて返る程、静かで且氣味わるかつた。

ナポレオンはその中を歩いてクレムリン宮殿に入つた。そして、さりあへずこの無人の町に市長を任命した。

氣味わるき夜は來た。不安なる無人の都の夜が來た。大都是一點の灯もなく静まり返る。たゞその一隅クレムリン宮殿にのみ、あか／＼とした燈火が見える。はるかにそれを望むと、物淋しさ恐ろしさが自然に湧く。かくて不安の夜の無人の大都を、全軍は蟻の匍ふ音にも耳を傾ける程、神經過敏に警戒した。

## 二 炎の海、炎の河

深い恐怖と静けさにつゞまれた無人の都は、暗い夜に蔽はれつくして、空には、寒色を帯びた星影が二つ三つ動く許りで、あだかも、世界の涯のやうに物淋しい。

ナポレオンは、その夜おそくまで軍務を見てから、クレムリン宮殿の一室に横になつた。疲れ切つて居たので、ぐつすり寝こんでしまつたが、翌日の午前四時頃、不意に町の一角から起つた。

「火事だ！ 火事だ！」

さいふ叫び聲に呼びさまされた。直に床を蹴つて起き上り、宮殿の窓から望み見るさ、はるか彼方の市の一角に、松火の火の如く燃え上る焔が二三ヶ所小さく見えた。何者が火を放つたのであらう。しかしその火は、不眠不休で市街を警戒してゐたフランス軍のために辛くも消し止められた。



無人の市に、不意に起る火災！ 何さいふ無氣味、何さいふ危険、警戒は翌日から更に一層嚴重になつた。

再び不安なる夜が来た。その夜も前夜と同じく市の四方に火の手があがつたが、大事に至らずして消し止めた。

三たび更に不安なる夜が来た。即ち紀元千八百十二年九月十六日夜。前夜と同じく町の四方に星の如く現はれた火は、折からの烈風をうけて毒蛇の舌の如く、闇をつんざいた。

世界歴史の重要な節を成すモスクバの大火はこれよりはじまらむとするが、その大火の惨況を説くより前に、かくの如く、二夜三夜に互つて執念くも火を放つたものは何者か、さいふ事について、しばらく説く所なければならぬ。

露帝アレキサンドルは、愈々オポレオンがロシアに侵入すると決するや、自國の軍兵が、到底フランス軍の精銳に敵する事の出来ないのを早くも見て取り兵を用ふるよりも、他の計略によつてナポレオンを苦しめる方がはるかに得

策なる事を思ひ、ナポレオンの大軍が國境を越えて侵入するや、これさいふ抵抗もせず、豫定の退却のみを續け、退却の途中、沿道の民家、糧食、糧秣等を悉く掃きすて、勢に乗じてナポレオンがモスクバに入るや、惜し氣もなくその國民的、歴史的首都から、人民を悉く立ち退かせ、そのまゝ空虛として敵手に委ねたのであつた。一戦も交へず都を敵の自由に委せたのは、政治の中心はすでにペテルブルク(今のペトログラード)に移つて居たので、モスクバがたゞひ敵手に落つることも、左程の苦痛さはならなかつたからである。

アレキサンドルのこの計畫は、果して實戦以上にナポレオンを困らせた。彼はロシアに進入はしたが、沿道到處、宿るに人家なく、食ふに糧食なく、馬に與ふる飼料もない。本國より運び來つた糧食も、次第に残り少くなつたが、モスクバを占領すれば、それ等の欠乏は充分補充し得らるゝ事さ信じ安んじて進軍し來つたのであつた。

ところが愈々モスクバに入城して見れば、豫想は全くはづれて了つた。露



軍は全市民を立ち退かせると共に、一擧にこの首都を焼き拂つて、更にナポレオンを窮境に陥れよう謀つたのである。喜んで、勇んで占領した敵の都は、實は鼠の爲の袋のやうなものであつた。フランス軍は、勢に乗じて、自ら袋の中へ躍り込んだ鼠の運命の下に立つて居た。入城以來、引きつゞき三晩に起つた放火も、即ち戦はずして敵を苦しめんとする露軍の仕業であつたのである。物語は前に返つて大火に及ぶ。

九月十六日の夜、モスクバ市の四方から、あけ方の星の如くさゝやかに現はれた火は、折からの烈風にあふられて、忽ち悪魔の如く燃えひろがらうとした警備中のフランス軍は、全力をつくして消火につこめたが、面もふらず燃えひろがる炎の勢は、到底人の力に支ふべくもなく、闇を劈く、炎の河は風にゆられつゝ全市を流れた。空は夕焼の色の如く眞赤に焼けたゞれて、火の移り行くまゝに波のやうにゆれ動く。高樓の窓から噴水の如く噴き出す炎の柱が、しきり騰るさゝやがて、凄じい物音と共に、大建築が片端から雪崩のやうに崩

れて行く。崩れる度に火の粉は風に乘つて、火山の噴出を眼前に見る如く八方に吹き散らされ、又新しく燃えひろがる暗い夜の蔽ひの底に、クツキリ描き出された大火のモスクバー。唯見る炎の波、炎の河、炎の雨。

フランス軍は、この凄じい火災を浴びつゝ全力をつくして消火につこめた。士官の叱咤する聲、怒號する聲、車の走る音、炎の渦巻く叫び、物の燃え行くひびき、建築の破壊する音、——あらゆる音響は、あだかも地獄の底にひびくが如く、地響をなして狂ひ起つた。

火は益々盛になつた。風にあふられて、天空に渦巻く火炎の舌は、最早全市を焼きつくさねば、到底鎮火する見込がなくなつて了つた。流石のフランス軍も身体綿の如く疲れて、茫然としてこの大火の壯觀に見されるの外なくなつてしまつた。

夜は未曾有の大混雑の中に明けたが、火の手はなかく静まらうともせぬ。日一日焼け延びて、又もや夜に入つたが、火勢は愈々つのる許りである。



ナポレオンは、クレムリン宮殿の窓から、この凄じい大火の光景を望み見た。炎の海は涯もなく狂ひひろがって、全市は坩堝の中に溶けた鑛物のやうに眞赤である。空は雲に映る炎の色に凄じう焼けて、湧き立つ海のやうに物凄じい。猛火はやがて宮殿にまで追つた。集團をなした火の粉の礫は、彈丸のやうに窓をつき破つた。火焰の煽りは眉を焼かむ許りに近づいた。すでにして炎の旋風は宮殿の四周を圍んだ。碎ける音、崩れるひびき、それ等はナポレオンの耳許近くに間断なく小止みなく轟いた。

それでもナポレオンは自若として動かなかつた。左右の將士は交る／＼宮殿の危険を説いて、他に移るべきをすすめたが、彼は頑として直立したまゝこの宮殿を捨てようとはしなかつた。

### 三 困苦漸く全軍をかそふ

猛火は終に宮殿に移つた。窓を破り、尖塔を壊し、廊下に佇んだナポレオン

の身邊には、焼け燻る木片と、崩れ行く土塊と、飛び散る火の粉の塊とが、雨の如くに降り注いだ。

ナポレオンはそれ等の危険を全然意に介せざるもの如く、双眼鏡を右手に握り、左手をゆるやかに胸にあて、焦熱地獄の如き廊下を往きつ戻りつ、眼を上げては熱風の如く襲ひ来る火焰につまられたるモスクバ市街を注視した。

あゝ！ 滅亡のモスクバ！ 將に灰燼に歸せむとするモスクバ！ 汝を得んが爲に予は懸軍萬里、白馬に打ち跨つて、雲叢重をへだつるこの露境に入つたのである。今不意の災厄に會して、むざ／＼と汝を捨つるは、予の如何にしても忍び能はぬ所である。聖都モスクバ！ 汝は敵國の都にあらずして、今や我手に握る唯一の聖都ではないか。しかも汝の愛すべき姿は、呪はしき火焰の底に喘ぎつゝある。予の軍隊及予の心は、汝と等しく大火の底に悶へつゝある。常勝の劍折れて、運命の下に汝を捨てんとする予の感慨！ 美しき滅亡の都モスクバよ。……



危険は更に甚しくなつた。宮殿の諸門はすでに火焰の閉ざす處となり、悪魔の舌は將に武器庫、彈藥庫に移らんとするのである。危きこそ累卵の如し。右の將士は聲をからして退去を迫つたが、ナポレオンはなほも動かうまはせぬ危いかな。彈藥庫爆發すれば、彼の一身は果して如何成り行くか。將士は最早退去をすゝめるのではなく、面をおかして諫言しはじめた。ここに於て、ナポレオンははじめて、名残惜しくもクレムリン宮殿を捨てる事に決したが、火はすでに諸門を鎖して出口がない。白煙にむせび、猪を浴び、辛うじて城外に退去し、ふりかへり見れば宮殿は火中に聳えてあだかも一大火山の如く、やがて彈藥庫の爆發と共に、脆くも雪崩れの如く崩れ、凄じい大火柱が天に沖すると同時に、火の粉は渦巻をして八方にみだれた。大火は前後五日に亘つて燃えさかり、さしも廣大雅美をほこつたモスクバ全市を焼きつくして漸くしづまつた。後はたゞ、涯もない黒焦の殘骸。夢の如く大都是滅んだ。

消火と退去の爲に疲れ果てたフランス軍は、モスクバの全滅と共に忽ち宿舎に困つた。露軍一世の果斷的計略は美事に成功したのである。郊外に退いた處で、限りある民家に、無数の軍兵を入れる事は到底出来ぬ、次には糧食の供給が全く絶えた。寝ぬるに床なく、食ふに食なし。しかも災厄はそれだけではない。更に大敵は刻一刻近づいた即ち、ロシア特有の嚴寒である。ロシアはその地が北に偏して居るために、九月の末になれば早や雪を催す程の寒國である。南方フランスの暖地になれた軍兵は、その豫想がなかつた爲に防寒具の用意が十分でなかつた。折も悪し。その年は、例年に比して寒氣が一層甚しかつた。身を切るやうな寒さは、たゞさへ困り切つたフランス軍を、遠慮もなく襲ひはじめたのである。形勢一轉してこの窮境に迫つたナポレオンの胸中は果して如何であつたであらう。今はその精銳なる武力も何の役にも立たない。けれどもナポレオンは、



なほ露帝が、我武威に恐れて、媾和を申しこむ事を信じて居た。よつて、忍び難い困苦を戦ひつゝ、媾和の日を待つ爲に、不便極まるモスクバ郊外に止まつた。

日は經つて、フランス軍の困苦は、寒氣の迫るに益々甚しくなつたが、もさより、帝都を犠牲にしてまでも、のるか反るかの放れ業を行ひ、それが首尾よく成功して、ひそかに祝盃を擧げて居る露帝アレキサンドルが、何の爲におめくゝ媾和を申し込まうぞ。ナポレオンが困苦に陥れば陥る程、ペテルブルグにある露帝の態度は益々強く、兵を動かさず、媾和を申しこまず、坐してフランス軍の自滅を待つた。

これが普通の場合であるならば、一世の英雄、フランス皇帝、今はヨーロッパ全土の大牛を掌中に握るナポレオンが、黙して見て居よう筈がない。精兵を指揮して長驅ペテルブルグに迫り、一舉にしてこれを陥れたであらうが、悲しいかな、當時は、敵軍ならぬ、寒氣と糧食とを營になやまされて居る折

柄さて、流石のナポレオンも空しく拳を握るの外はない、愈々媾和の申込がないと定まるや、今度は自分の方から和議を提出したが、足許を見こんだ露帝はそれさへ承諾しない。フランス全軍が露領を引上げた後に於て、はじめて和睦しよう返事した。

空しく待つ事三十五日。困苦と寒冷さは日に甚しく、流石蓋世の英雄ナポレオンも、すでに萬策つきて止む事を得ず、全軍をまさめて歸國の途についた。常勝の軍、今や無惨なる退却の途につく。はかり知られぬものは運命である。遠征軍門出の四十五萬人。今退却の途につくもの總計十五萬。その惨況以て知るべきである。

#### 四 吹雪の嵐とコサツクの追撃

西曆一八一二年十月十九日。ナポレオンの全軍は、疲れ切つた氣を引き立てつゝ、モスクバを發して、空しく退却の途についた。時に例年に比して更に一



層はげしい寒氣は、終にロシア平原特有の大吹雪を伴ふて、フランス軍がボロ  
 ノについた頃は、河水全く氷結し、吹雪は嵐にさそはれて、面も向けられぬ  
 大荒れさなつた。地上に積る雪はすでに尺にあまり、空は無限の灰色に曇り、  
 横なぐりに吹きつける嵐は、たゞに吹雪を伴ふばかりでは、すでに降りつもつ  
 た地上の雪を巻き上げて、悪魔の如く荒れ狂ひ、嚴寒血も凍らむばかりである  
 涯もない大平原の、雪につまれば、旋風に吹かれ、前途も見えぬ白皚々の只  
 中を、防寒用意もなく、糧食の手當もなく、疲れ切つた五体を銃身に托して、  
 よろめきつゝ、全軍は行進をつゞけた。面を打つ礫のやうな吹雪の旋風をよけて  
 銃身を杖に前途をすかし見ると、早や、寒氣と勞苦さに堪え切れずして、路傍  
 に倒れ伏した味方の將士が數限りもない。吹雪は益々みだれ狂ふて、あはれな  
 死骸を忽ちに埋めて去る。  
 隊列も次第に崩れ、遂には三々伍々、互に聲をかけ、勵まし、辛うじて足を  
 ふみしめ進む中には、前隊との聯絡も全く絶えて、空しく雪の中に埋もれ果て

る者も頗る多い。  
 路傍に倒れた戦友の死骸を見るさ、その服を奪ふて己れが防寒用とし、餓に  
 せまつては愛馬を殺してその肉を食ひ、砲車をひく者は惜しげもなくこれを路  
 傍に捨てて、たゞ、自分の身一つを運ぶ事に全力を盡した。  
 困苦はたゞこれのみではなかつた。弱點に乗じた露軍は、敏捷なるコサツ  
 ク騎兵を雪中に出没せしめて、巧みに、このあはれなる敗殘の軍を襲はせた  
 コサツクは、もさより雪に馴れ、馬上に長槍をふるつて、吹雪の中を自由自在  
 にかけてめぐり、困苦になやむフランス軍を脅かした。たゞさへ吹雪と戦ひ、粗  
 食と戦ひ、殆んど死に瀕した全軍が、さうしてこの鋭鋒に手向ふ事が出来よ  
 うぞ。モスクバを發した時の十五萬は、十一月十四日、スモレンスクについた  
 時僅かに五萬、ベンシナ河を渡る頃には驚くべし僅かに二萬。退軍の困難以  
 て察すべしである。  
 この困難なる退軍にあたり、將筆すべき一事は、當時フランス軍の殿將をつ



さめたネー將軍の働きであつた。

ネー將軍は、殿軍の將として、面も向けられぬ大吹雪の平原を縦横にかけめぐつて、落伍せる味方を激勵しつゝ、一方、出沒自在に襲ひ来るコサツクの精兵を相手に、苦戦に苦戦を重ねて味方の退却を援護した。その効蹟の爲に、たさひ無惨の敗北になつたさはいへ、さもかくも全滅の悲運を免れる事が出来たのである。

ベレシナ河を渡つて、殘兵僅かに二萬となるや、ナポレオンは俄に、この大敗戦の爲に、今まで歸服して居た諸國が、悉く彼に叛くおそれのある事に氣づき、殘兵をネー將軍に托して、急ぎ、橋に乗つてパリイに向つた。

十二月十八日。ナポレオンは辛うじてパリイにかへり、新に兵をつつて非常の變にそなへた。折から、ネー將軍のひきゐる殘兵も、命辛々パリイにいた。

ナポレオンのロシア遠征！ この企ては右の如く全く失敗に終つて了つた。

四十五萬の大軍、失はれたるもの三十五萬八。軍馬を殺すこゝ六萬頭。大砲千門、駄車、乗車を併せて二千輛は、退軍の途中、雪中にすてたものである。

天佑によつて、ナポレオンの精兵を驅退した露帝アレキサンドルは、喜びのあまり、紀念の貨幣を鑄造し、その表面に記して曰く、

「吾等(露人)の力にあらず、吾(露帝)の力にもあらず、たゞ陛下(天帝)の明智による。一千八百十三年一月」。

一語簡にして意味深長。露國上下が、如何にこの戦勝に喜び狂したが見えるではないか。

百戦の英雄は遂に最後の戦に見るも無惨の敗北をこつた。一葉落ちて天下の秋を知る。ナポレオンの末路は遂にこの戦に芽ぐみそめたのであつた。







事はあるまいかと、恐怖の雲は常に全艦隊を蔽ふた。就中、北海における漁船砲撃の失態は如何に彼等が神經過敏であつたかを證するに餘りがある。

十月二十一日夜。黑暗々たる北海の波を蹴つて、不安なる進航を續けて居た全艦隊の右舷にあつて、怪しい船影が出没した。素破！日本水雷艇の襲撃よ！と、警報は電の如く全艦隊につたはり、物凄く探海燈の光は、暗を破つて右往左往に照射せられた。ついで、その船影の何物なるかを確める間もなく、戦闘準備の號音は鳴り渡つて、暗を劈く砲聲が、殷々轟々として夜の海を壓した。砲弾は花火の如く爆破して、怪しの船隊の恐れまどふ光景は手に取る如く明らかに見える。雨の如き猛射は暫時續いたが、敵からは何の抵抗もない許りか、追々に、それが日本水雷艇隊ではないらしい事に氣づく者もあつて、艦隊は、いつかはなしに砲撃を中止し、又進航を續けたのであつた。

奚ぞ知らん。怪しの船隊は、英國漁船の一隊が、夜に乗じて網を北海にひいて居たものであつた。何等の武装もない小帆船の事なれば、この砲撃の爲に

被つた損害も非常に多く、他日國際上の一問題となつたのである。本國を離れて未だ幾干ならずしてこの醜態を演じたバルチック艦隊は、世界の嘲笑を浴びつゝ依然進航をつゞけた。

通過するところは、すべて中立國の領海であるから、石炭糧食の積込はおろか、寄港する事さへ決して自由ならず、出航以來、一二中立港に、一定限の時間だけ碇泊したのみで、地中海の入口なるシブラルタル海峡まで進航した。ここより東に向ふには、いふまでもなく、地中海を直行して、スエズ地峽によるのが最も便利であるが、それすら、中立地域なるが故に、地峽が大艦隊の通過に充分便利でないの爲に、後れて、リバツ港を出帆した比較的輕快な軍艦より成り立つた第三艦隊(司令官子ボガドフ少將)のみをスエズにまはし主 力 艦 隊 は、總司令官ロゼストウエンスキー提督自らこれを率ゐて、はるくアフリカの南端、喜望峯を迂迴し、第三艦隊とは、アフリカ東海岸なるマダカスカル群島に於て再會する事とした。



喜望岬迂迴事業の苦心は筆にするもなほ足りない。綿々たる遠征の情に泣くばかりではなく、又、單調なる航路の平凡さに倦怠して、士氣の沮喪を來したばかりではない。なほ、日本艦隊來襲の恐怖と、旅順方面の消息は、常に常に全艦隊の神經をかきみだした。のみならず、航海の困難と、前途のため少さく、種々の流言は、さなきだに消沈しつゝある士氣を一層萎えさせた思へ。萬里の波濤をはるく東洋にまで向ふ途中に、かくの如き種々の障害が起るのみか、よしんば無事に東亞の空を望み得たとしても、優勢なる日本艦隊を相手にして果して勝利を博する事が出来るか否か。加ふるにその頃、ロシア本國では、バルチック派遣の愚を論じて、今慘憺たる苦心の下に航海しつゝある艦隊を呼び戻すべしと唱へる説が有力であつた。意氣の沮喪するも亦止むを得ぬところではないか。

ともかくも、困難なる進航をしいて繼續して、漸く、喜望岬迂迴を終り、マダガスカル島に近くなつた頃、更に失望すべき報知は傳はつた。即ち旅順陥落

である。

艦隊東航の意味は、これで正しく少くも半減した事となる。マダガスのノーズベール港についてからは、進むべきか、退くべきか、はた又止るべきかが全艦隊の問題となつた。しかもロゼストロウエンスキー提督は、何等の命令も下さずして、一ヶ月以上を港内に碇泊せしめた。スエズ通過の第三艦隊はまたつかない。旅順すでに陥落して、東洋艦隊が殆んど全滅した後、ロシア海軍の全力を集めたこのバルチック艦隊は、空しく中途に漂泊して居るのである。

碇泊中に、艦底には、海藻や貝殻が夥しく附著して、速力はいやが上にも鈍つた。速力と共に、士氣もいやが上にも沮喪した。

やがて第三艦隊の到着と共に、幾分その意氣を恢復して、決然、軸を揃へて東に向つた。印度洋航海中の困難と不安はこれを省き、漸く、三十八年五月、勇ましき首途の日より九ヶ月の後、この大艦隊は支那海に現はれたのである。



次の問題は、浦壙斯徳に入るには、對馬水道よりすべきか。又は、津輕、宗谷の兩海峡によるか。さいふのにあつたが、總司令官は斷然對馬水道をさる事とし、いよく虎の尾をふむが如き心地しつゝ、二十六日、對馬水道を指して進發したのである。戦艦、巡洋艦、砲艦、驅逐艦、水雷艇、運送船、特別船、併せて三十有八隻、隊伍堂々、二列縦陣を作つて進航した。世界有史以來の大海戦は、今や目睫の間に迫つた。

## 二 對馬水道の硝煙彈雨

明くれば明治三十八年五月二十七日。

當時朝鮮領海灣の根據地に、敵艦今やおそしと待ち構へて居た帝國聯合艦隊は、神の如き東郷海軍大將指揮の下に、静々灣口を出で、哨艦を西に放つて、敵艦隊の來航を待ち受けた。

哨艦和泉は、當日早曉、對馬水道の西に於て、長蛇の如き陣形を成した、敵

のバルチック大艦隊を、狹霧の中に發見した、あゝ、敵は果して對馬水道に向つた。三十八隻の艦隊は萬里の波をこえ、九箇の月をけみしてわが眼前に現はれたのである。和泉は直に、敵艦愈々對馬水道に向ふ由を本隊に通報し、そのまゝ、大膽にも唯一隻、敵艦隊の右舷に並行して、北へくゞ進行しつゝ、その動靜を監視した。

狹霧は次第におさまつて、波は高けれども天氣晴朗、日露の運命を制すべき大海戦の舞臺は、今や洋々として開けたのである。

和泉の大膽なる行動によつて、手にさる如く敵艦隊の様子を知り得た帝國聯合艦隊は、時分はよしと、旗艦三笠を先頭として、徐々敵の前路を遮りはじめた。ガーフにひるがへる軍艦旗は、これ、連戦連勝の光榮ある帝國軍艦旗、波のしぶきをあげて吹き渡る日本の潮風に、勇ましくもヒラ／＼とひらめき渡る。山の如き巨艦の隊列は、一糸みだれず肅々として波を蹴り、黒煙團々として立ち上るあたり、旗艦の司令塔には、莞爾として笑をふくんだ東郷提督



が、靜かに、彼方水平線のほさりより、次第に影をあらはす敵艦隊の動靜をうち守つた。

二列縦陣のまゝ、中央に特別船をさしはさんだ敵艦隊は、波の彼方より、決死の覺悟を吐き出す黒煙に見せつゝ、刻一刻と視界に近づいて来る。

兩艦隊が、漸く彈着距離にまで相近づくこゝ、我は全く敵の進路を横切つて丁字形の陣形となつた。あせりにあせつた敵は、早くも砲門を開いて一齊射撃をはじめた。殷々轟々、波を壓する砲聲、海若のために眠りよりさめ、鞆鞆たる海波、ために湧き立つかき疑はれる。砲彈は、わが艦隊に近く落下して、數十丈の水柱は、噴水の如く立ち昇る、しかもわが艦隊は依然として進行をつゞけ、肅として應戦しなかつた。

彼は名にし負ふロシアの精銳を集めたるバルチック艦隊、我は、神佑による正義の旗風に、すでに東洋艦隊を撃破しつくした光榮ある戦勝艦隊、日本海の波は無心に怒吼しつゝあれど、今や火蓋を切つた兩艦隊の責任の重大さ、誠

に思ひ見るだに血の躍る思ひがするではないか。

敵艦が一齊に火蓋を切つて、砲口よりほさばしり出る白煙の爲に、その艦影を包んだ時、丁字に敵を壓した聯合艦隊の旗艦には、彼のイギリスの子ルソン提督が、トラファルガルの海戦に於て掲げた信號に比して、更に一層の意義ある信號旗が高く掲げられた。實に皇國の興廢はかゝつてこの一戦にある。全艦隊將士の血が花の如く燃えた。ふるへ、朝日に匂ふしきしまの大和だましひ。立てよ。天佑を保有せるわが日本のほまれある武士。

つゞいて戦鬨の號音が鳴りひびいた。慎重に一糸亂れぬ艦列のまゝ、第一弾は旗艦三笠の右舷十二吋砲、つゞいて全艦隊の砲火は、先頭に立てる敵艦艦スワロウ目がけて集中した。その照準に何の狂ひがあらうぞ。一弾は一弾よりも猛烈に、忽ち、敵艦の甲板は砲彈の破裂による火災を起し、黒煙濛々として立ち上るを見る間に、その煙をぬふて、惡魔の如き火災は炎々として燃え上つた。



敵味方ここを先途と打ち出す砲丸は、或は艦上に、或は海面に、雨の如くに降りそゞいだ、敵艦上に落ちたものは、凄じい爆発と共に黒煙と火炎をふき出し、海面に落ちたものは、數十丈の水柱を高くくふき上げた。

この凄じい光景の中に、わが艦隊は、あたかも練習運動の如く、旗艦の導くまゝに一進一退、廻轉、旋回、自由自在、しかも打ち出す弾丸に一も虚発なく、敵旗艦スロロウは、蜂の巣の如く撃破せられ、今ははや、甲板上げ何一物も影を止めず、乗員も多くは戦死して、僅かに完全なる大砲一門を餘すのみとなり、戦闘力つきて遂に艦列を離れた。

見よ！ その惨憺たる光景を！ 舷側は恐しくも、こはたれたる蜂の巣の如くに大孔にみち、ほぼしらは折れ、煙突は砕け、その他甲板上のあらゆる装置は跡方もなく打ち破られて、甲板の諸所よりは、もはや消すにも消されぬ大火焰が、火山の如き黒煙を伴ふて、濛々と噴出しつゝあるのである。

わが艦隊の砲火は、このあはれなる旗艦に注ぎ同時に、主として二番艦（今

は先頭艦）アレキサンダーに集中した。敵艦隊は、常に、隙を見てはその針路を轉せんとしたが、この効遂に空しく、アレキサンダー亦見る間に濛々とした火焰につままれて、スロロウと同じく戦列を離れ、三番艦ホロザの先頭に立つた。

この時、絶えず敵の先頭を壓して、敵に大損害をあたへつゝあつた聯合艦隊は、依然として、あたかも演習の如く、敵より見れば心にくきまで自由に、猛烈にして正確なる砲撃を敵に送つた。

敵艦隊は、すでに先頭二戦艦の列をはなれたばかりではなく、後續艦中にも、火災を起したるもの、沈没したるもの、一刻は一刻よりも多きを加へて、艦列次第にしどろもどろとなつた。加ふるに、總司令官ロゼストウエンスキー中將は、今なほ瀕死にせまれる旗艦スロロウにあつて、身に數ヶ所の重傷を被り、指揮はおろか、簡単な命令も下せぬ始末である。

すでにして三番艦ホロザも、わが驚くべき正確なる砲撃に、忽ち火災をひ



き起して沈没し、つゞく四番艦アリヨールも、艦腹に大孔を穿たれて甚しく傾斜しつゝ艦列を離れた。

この第一回の戦闘に於て、敵は、主力戦隊を殆んど全く失ひ、残れる諸艦も悉く重傷を負ふて、隊伍は全くみだれ果てた。わが艦隊には何の損害もなく、これ等敗残の敵艦を包圍して餘す處なく討ち果さんとする中に、二十七日の暮ある日は遂に暮れた。夜は來た。暗に乗ずる水雷艇隊の活動は將にはじまらむとするのである。

### 三 敵旗艦最後の奮闘

水雷艇の夜襲に先立つて、暫らく壯烈なる敵旗艦スワロロウの最後について語らしめよ。

一弾は一弾を追ふて、正確に命中する我艦隊の砲撃に、スワロロウは、最早、炎々として燃え上る火災を消し止める力もないまでに撃破せられた。全艦濛々

たる黒煙につゞまれ。左舷に傾斜する事甚しく、舷窓より、甲板より嵐の如く吹き出す火焰は、斷末魔の吐息の如く悲惨である。

味方の艦隊が、見るも無惨に打ち破られつゝも、死力をつくしてのちれ去らうと、北に南に、前に後に進路を變換するにつれて、あはれなる旗艦も、物の役にも立たぬ機關を便りに、不具者の如く不恰好なる廻轉をなしつゝ、味方の後を追はむとする。

わが艦隊の砲撃は、依然として敗残の旗艦に集中した。甲板の上は、たゞこれ爆裂する砲弾の雨である。熱火の旋風である。間斷なき爆撃、飛び散る弾丸の破片、濛々とした爆煙は、寸時も止みなく、僅かに残れる乗組員を襲ふた。

提督ロゼストウエンスキー中将は、甲板に降るべき通路を絶たれたる上部司令塔内に、重傷を負ふて、無意識の状態にあつた。

旗艦はかくの如き悲惨なる状態にありながらも、僅かに残れる艦尾の七十五



ミリ砲一門を以て、命の限り奮闘した。  
 漸く、この旗艦の危急を救ふべく、驅逐艦ブイヌイ號が近寄つて來た。先何よりも司令官を移乗させねばならぬ、提督は重傷である。黒煙を負へる旗艦は僅かに一門の備砲を以て、わが艦隊の猛烈なる砲撃に應じつゝ、重傷の司令官を他に移乗せしめんとするのである。その危険！ 誠に言語に絶して居る。  
 しかのみならず、旗艦の舷梯はすでにこぼたれて用に立たず、提督移乗の爲には、たゞ驅逐艦を旗艦の舷側間近く接近させ、上より提督を吊り下すより外はなかつた。戦艦の舷側近く、小驅逐艦を接近させる事は、誠に危険至極の放れ業で、萬一過つて衝突せんか、驅逐艦は微塵に破碎するより外はないのである。しかも當時はそれをかへり見る餘裕はなかつた。重傷の提督を吊臺にのせて、吊臺に綱をつけて、舷側に吊り下げ、驅逐艦の波に乗つて近づくと一刹那、荷物を投げるが如く吊臺のまま甲板に投げ乗せたのである。しかも、これ等がすべて、猛烈なるわが砲火集中の裡に行はれた事であるのは、敵ながら天晴さ

いはねばならぬ。  
 提督移乗して、「ウラー」の歡聲諸共、驅逐艦は舷側をはなれてはるか彼方に航走し去つた。見まはせば、暗憺たる硝煙彈雨の中に、味方は散々に打ち破られて、今しも戦艦ボロザノは、噴水の如き大水柱と、雪の如き潮を海面に止めたまゝ、海底深く沈没した。  
 旗艦の運命も最早眼前に迫つて居る。乗組員一同は、依然として隊伍整々たる日本艦隊の行動を眺めつゝ、機關の運轉の自由ならぬまゝに、ひっそり味方にさりのこされ、火炎を吐きつゝ海中に漂ふた。  
 七時、通りかゝつたわが水雷艇が、旗艦の死命を制すべく近づくと、旗艦は健氣にも唯一門の砲を以て力限り應戦したが、やがて一發の水雷を艦腹にうけて、遂に沈没した。しかし、その最後の最後まで、勇戦力闘をすてなかつた事は、敵ながら、旗艦の責任をつくした天晴なる働きといはねばならぬ。  
 夜に入つて、我水雷艇隊は、暗を利用して、附近に漂ふて居る敵艦の死命を



制し、又、新しく損害をあたへんために、折からの山のやうな怒濤を蹴つて襲撃したが、敵も、わが水雷艇の恐るべき事を知つて居るので、サーチライトを縦横にふり照らし、雨のやうに弾丸を撃ち注いで、死物狂に撃退しようとした。

勇敢なるわが艇隊は、この危険を冒して、敵々敵をかけなやましたが、不幸にして、三隻、亂下する敵弾の的となつて沈没した。これ、古今未曾有と唱へられた日本海々戦における我艇隊の受けたる損害のすべてである。

#### 四 大艦隊の末路

翌二十八日は、前日の如き大海戦は行はれず、主として追撃戦であつた。この朝、敵の第三艦隊は、子ボガドフ司令官引率の下に、白旗をひるがへして全部降参した。

敗残の諸艦は或は撃沈され、或は捕獲されたが、ここにたづぬべきは、總司

司令官ロゼストウエンスキー中將の行方である。

重傷を負ふた提督は、瀕死の旗艦スワロウより、驅逐艦アイヌイに轉乘したが、氣力つきて死人の如くベッドの上に横たはるのみ、軍醫は綱帯を施し、いろ／＼と手をつくして恢復につとめたので、漸く、おぼろ氣ながら意識を恢復した。

これを見るや、一幕僚はその側に近づき、

「閣下はまだ艦隊を指揮し得るお力を有せられますか」。

と問ふた。

悲惨なる敗残艦隊司令長官は、かすかに半眼を開いて、しばらく沈思した後「否、……何處にも……自ら見る通りぢや……司令は……子ボガド……に……」

苦しげに言ひ終るや、忽ち俄に元氣づき、活潑な調子で  
「艦隊前進！ 浦盤！ 針路東北二十三度！」  
と叫び、ガツクリとそのまゝ、枕に倚つた。



アイヌイはそれより、子ボガドフ少將を、第三艦隊旗艦ニコライ一世に。たづねて、司令權讓與の信紙をなし、それより浦塩に向はんとしたが、機關に故障を生じた爲に、又々提督を驅逐艦ペトウエイに轉乘せしめた。もはや他に頼むべき味方の艦船もない。ペトウエイは、萬止むを得ず、日本艦隊に出會ふ時は、提督の身の安全を保つ爲に、白旗を掲げて降を乞ふ覺悟を定めて北進した。

二十八日午後、ペトウエイ號が、鬱陵島附近にさしかゝるや、敗殘の敵艦を搜索しつゝあつたわが驅逐艦連は、忽ち追ひ縋つて火蓋を切らうとした。ペトウエイは白旗を掲げ、つゞいて提督在艦の由を信號して、相當の取扱を要求した。

連は思はぬ獲物に喜びながら一軍艦もろともに提督ロゼストウエンスキー中將を捕虜としたのである。

日本海軍の名聲を不朽ならしめ、今なほ、世界に一種の謎として驚がれつゝある日本海大海戦はかくして終つた。

はるく萬里の波濤をけつて東亞の急に赴いた三十八隻の大艦隊は、僅か二日間の戦闘に、影もなく全滅して了つたのである。想へば、艦隊東航は、果して何の爲なりしかをさへ疑はるゝではないか。もさより全滅を豫期した譯ではなく、必勝を期し、浦塩に着航して、わが制海權を奪はむとする計畫であつた事は、火を見るよりも明らかな事實であらう。それにしても、あまりに夢に似た最後の、敵ながら悲惨の極みではないか。

筆を結ぶにあつて、當時戰場にあらはれた敵艦數を、その最後を掲げて見よう。

一、戦艦(八隻)二六隻 擊沈 捕獲







世界七大血戰終

【不許複製】

大正三年十二月五日印刷

大正三年十二月十日發行

【定價金拾錢】

【郵稅全貳錢】

著者 岡本 政治

發行者 岡本 三郎  
大阪市東區北久太郎町四丁目五十一番地

印刷者 蒲田 徳之助  
大阪市西區立寄堀南通二丁目二二五番地

發行所

岡本偉業館

大阪市東區北久太郎町四丁目

電話東二一八七番  
振替大阪二九九一番



# 史談文庫

一	神免	二刀流	宮本武藏
二	報義	佐野鹿十郎	
三	武士道	岩見重太郎	
四	義勇	荒木又右衛門	
五	豪勇	斑鳩平次	
六	怪傑	稻生武太夫	
七	豪傑	高浪八郎	
八	怪勇	蟹江才藏	
九	誠忠	栗山大膳	
〇	富士の	曾我大膳	
一	槍山の	相馬大膳	
二	騒動	狐三次	
三	俠骨	野狐三次	
三	烈女	春日局	
四	三代	宇都宮鈞天井	
五	勤王	中山大納言	
六	大岡	徳川天一坊	
七	判官	幡隨院長兵衛	
八	加賀	織田大炊	
九	騷動	山中鹿之助	
〇	十勇士	五郎正宗	
一	孝子	曾呂利新左衛門	
二	剽逸	塚原卜傳	
三	洒落	塚原卜傳	
三	豪傑	木村長門守	
四	豊臣	木村長門守	
五	天下	鷗幸右衛門	
五	屋敷	東海道膝栗毛	
六	衛次郎	伊達家大騒動	
六	仙臺	伊達家大騒動	

# イクサ叢書

〔第一編 ワートルロー戦〕 各冊

〔定價金拾錢〕

〔郵税金貳錢〕

〔第二編 オルレアン戦〕

〔第三編 南北朝の合戦〕

〔第四編 パリ―籠城戦〕







278
85



終

